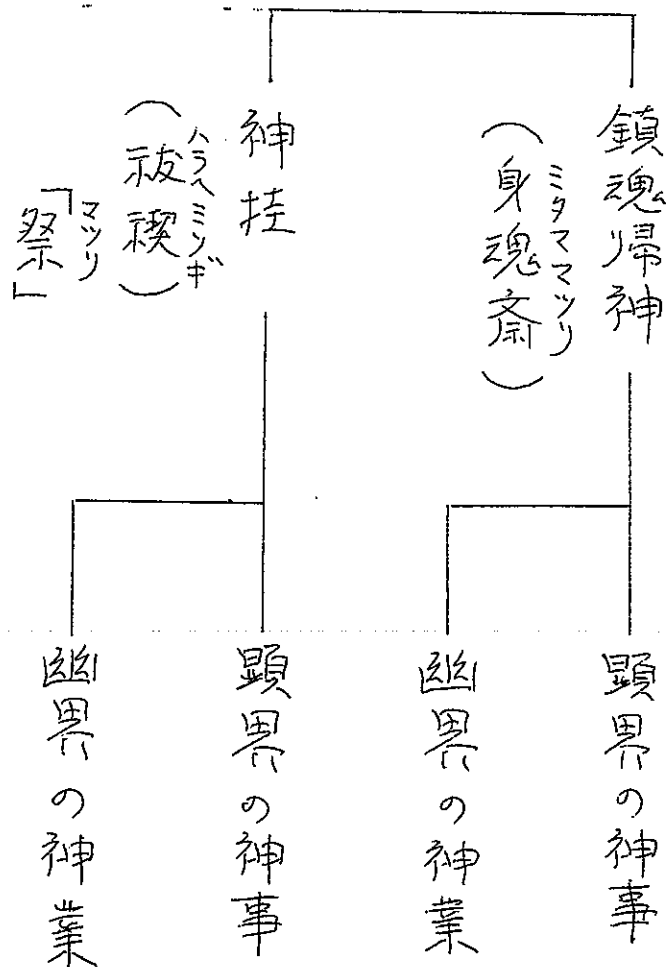


鎮魂帰神とは

身魂齋みたまたまつりで、遊離の諸魂を招致奉齋して高天原を築き日ひと火ひと日若宮との宇宙を産出し長養して神國たる人類世界と成さんとし成すなる禍津日まがつひ・八十禍津日おほまがつひ・大禍津日おほまがつひ・直靈なほび・大直靈おほなほびの神事かみかきであり、神挂とは現身を調伏し濟度し救出して白玉身と成して自ら其の白玉身裡に白玉樓閣を築き、之れを磐境いはさかたる胎磐として鏡かがみとし鏡かがみの船として極大極小の比を招祭りて直日なほひ・大直日おほなほひの人と成りて生誕するの祓禊はらへみそぎで、天照大御神あまてらすおほみたる天御鏡あまのみかがみ尊のみこと誕生の神儀尊容あれましである

日本民族の信仰 (一)



出入幽顯

夜寢床に這入つて將に眠に落ちんとする時の數秒間、朝醒めんとして將に意識が恢復せんとする間の數秒、此の間に天地の創めの消息があり、かくりよ幽界とあきつしま顯界の境界が體驗出來る。是は生死を超越し、自然と人生、差別と無差別の境目であり、絶對より相對に進發せんとする境目である。此の始源の境界を自在に出沒し得る様になつて、初めて惟神の道に就ての思索が可能である。故に太安萬呂も古事記序文に於て「幽顯に出入して」と斷はつてゐる。此の境地に於て古事記は述べられてゐるのである。

古事記上卷

并あはせて序

臣安萬侶言しんやすまろまをす。夫それ、混元一既に凝こりて、氣象未いまだ效あらはれず。名なも無く爲わざも無し。誰れか其の形を知らむ。然れども、乾坤四初めて分れて、參神造化五の首はじめと作り、陰陽斯こに開けて、二靈群品七の祖おやと爲なりき。所以このゆゑに、幽顯八に出入して、日月目九を洗ふに彰あらはれ、海水に浮沈して、神祇身を滌すすぐに呈あらはれき。故かれ、太素一〇は杳冥一一なれども、本教三に因よりて土くを孕はらみ島を産みし時を識しり、元始二は綿邈三なれども、先聖四に賴よりて神二五を生み人を立てし世を察しりぬ。寔まことに知る、鏡二六を懸たけ珠たまを吐はきて、百王二八相續三し、劍つるぎを喫くひ蛇をろを切りて、萬神蕃息ばんそくせしことを。安河やすのかはに議はかりて天下あめのしたを平ことむけ、

にコトドの訓注がある。絶妻の誓を言い渡すこと。

二 葦原中国の人民。

三 千人。

六 千五百人生もうの意。書紀には「吾則当産日将千五百頭」とある。産屋は古く産婦を隔離するために別に立てられた小屋のこと。

七 人の生と死の起原を説明したもので、死ぬ人より生まれる人の方が多いというのは第二義的な説明。

八 一説に云うことには。別伝をあげたのである。

九 女神が男神に追いついたので。

二 道及(シ)きの神、即ち道を追いついた大神の意。しかしチシキの本来の意は道を占め居ること。

三 ふさがった磐石。「塞(さ)る」は四段活用。

三 道から(伊邪那美命を黄泉国に)追い返した大神の意。古代の人々は磐石が悪霊邪鬼を防ぎかう呪力を有していると信じていた。

三 黄泉国の入口(門)に塞がっておられる大神の意。ヨミドニサヤリマスオホカミと訓んでもよい。

四 伊賦夜坂は今明らかではないが、延喜式神名帳下には出雲国意宇郡四十八座の中に「揖夜(ヤ)神社」、出雲風土記意宇郡の条にも「伊布(ヤ)神社」の名が見えている。また出雲風土記出雲郡宇賀郷の条には、「即北海浜有磯。自磯西方有窟戸。高広各六尺許。窟内在穴。八不を得入。不知深淺也。夢至此磯窟之辺。自必死。故俗人自古至今、号黄泉之坂、黄泉之穴也。」とある。意宇郡と出雲郡とは隔っているが、黄泉の坂が出雲国に密着していることは注意すべきである。

劍を抜きて、後手に布伎都都此の四字は音を以るよ。逃げ来るを、猶追ひて、黄泉比良此の二字は音

を以。坂の坂本に到りし時、其の坂本に在る桃子三箇を取りて、待ち撃てば、悉ことごと

に逃げ返りき。爾に伊邪那岐命、其の桃子に告りたまひしく、「汝、吾を助け

しが如く、葦原中国に有らゆる宇都志伎此の四字は音を以るよ。青人草の、苦しき瀨に落ち

て患ひ惚む時、助くべし。」と告りて、名を賜ひて意富加牟豆美命意より美までは音を以るよ。

と號ひき。

最後に其の妹伊邪那美命、身自ら追ひ來りき。爾に千引の石を其の黄泉比良

坂に引き塞へて、其の石の中に置きて、各對ひ立ちて、事戸を度す時、伊邪

那美命言ひしく、「愛しき我が那勢の命、如此爲ば、汝の國の人草、一日に千

頭絞り殺さむ。」といひき。爾に伊邪那岐命詔りたまひしく、「愛しき我が那邇

妹の命、汝然爲ば、吾一日に千五百の産屋立てむ。」とのりたまひき。是を以

ちて一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生まるるなり。故、其の伊邪那

美命を號けて黄泉津大神と謂ふ。亦云はく、其の追斯伎斯此の三字は音を以るよ。を以ちて、

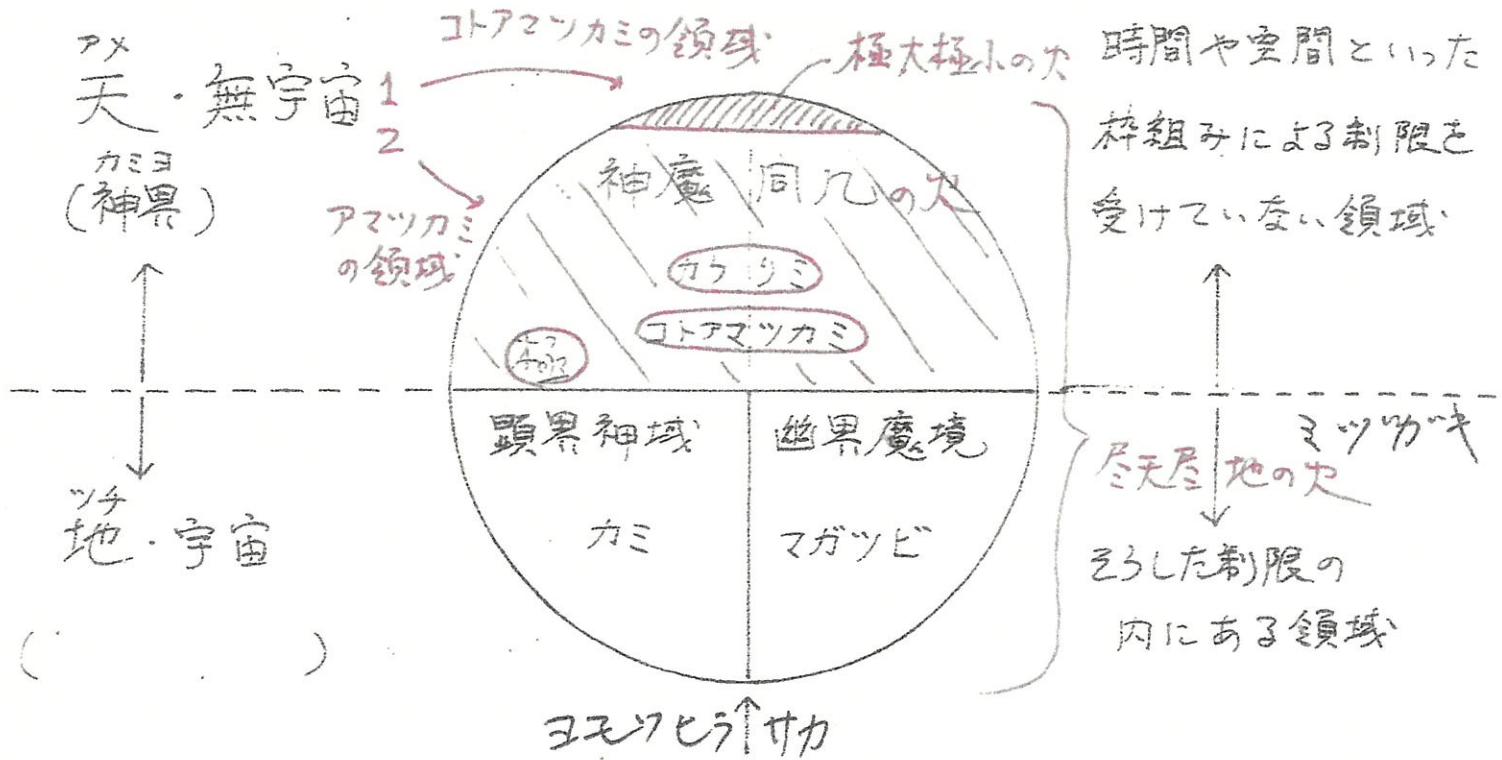
道敷大神と號くといふ。亦其の黄泉の坂に塞りし石は、道反之大神と號け、亦

塞り坐す黄泉戸大神とも謂ふ。故、其の謂はゆる黄泉比良坂は、今、出雲國の

伊賦夜坂と謂ふ。

天地概略図

アメとツチを合わせて、大宇宙と称する。



この二項対立の図式は、^{ツチ}地の側でのみ有効。
^{アメ}天の側には及ばない。

アメ

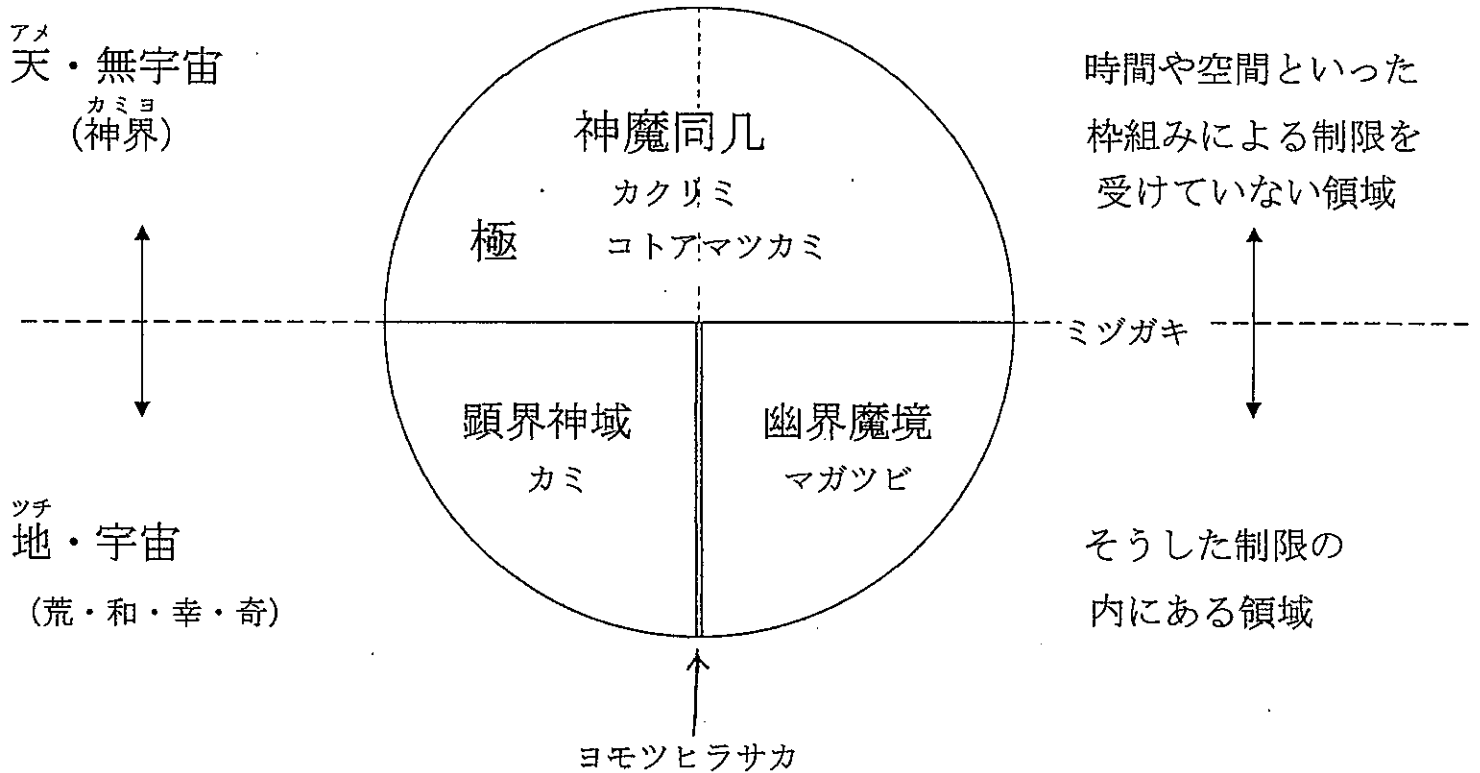
天とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域。

“ 物理学的に言えば、宇宙創世以前の領域、

アマツチ
天地概略図

アメとツチを合せて、大宇宙と称する



この二項対立の図式は地^{ツチ}の側でのみ有効

天^{アメ}の側には及ばない

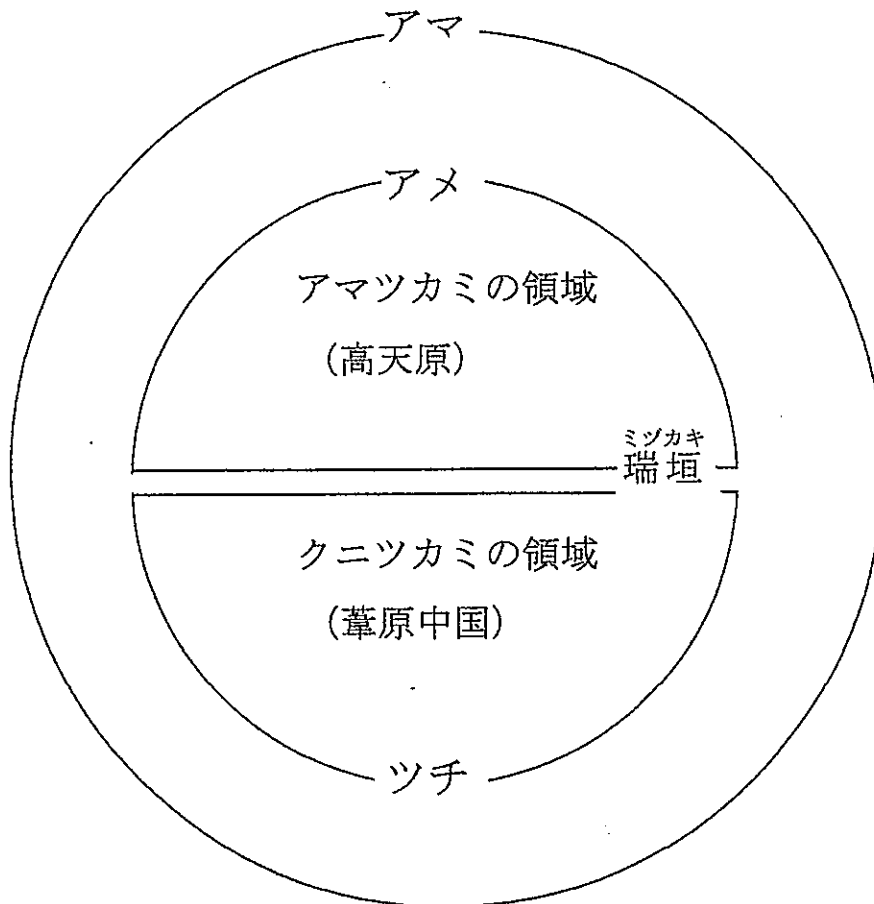
天^{アメ}とは、人間から無宇宙を見て「ア」と驚嘆する、

という時の「ア」の領域

天^{アメ}とは、物理的に言えば、宇宙創世以前の領域

天地概略図 第二版 (あくまでも概略)

コトアマツカミの領域 (無宇宙) -----	^{アマノイハヤ} (天石屋)	} 全部あわせて 「アマ」
アマツカミの領域 (無宇宙) -----	天アメ	
クニツカミの領域 (宇宙) -----	地ツチ	



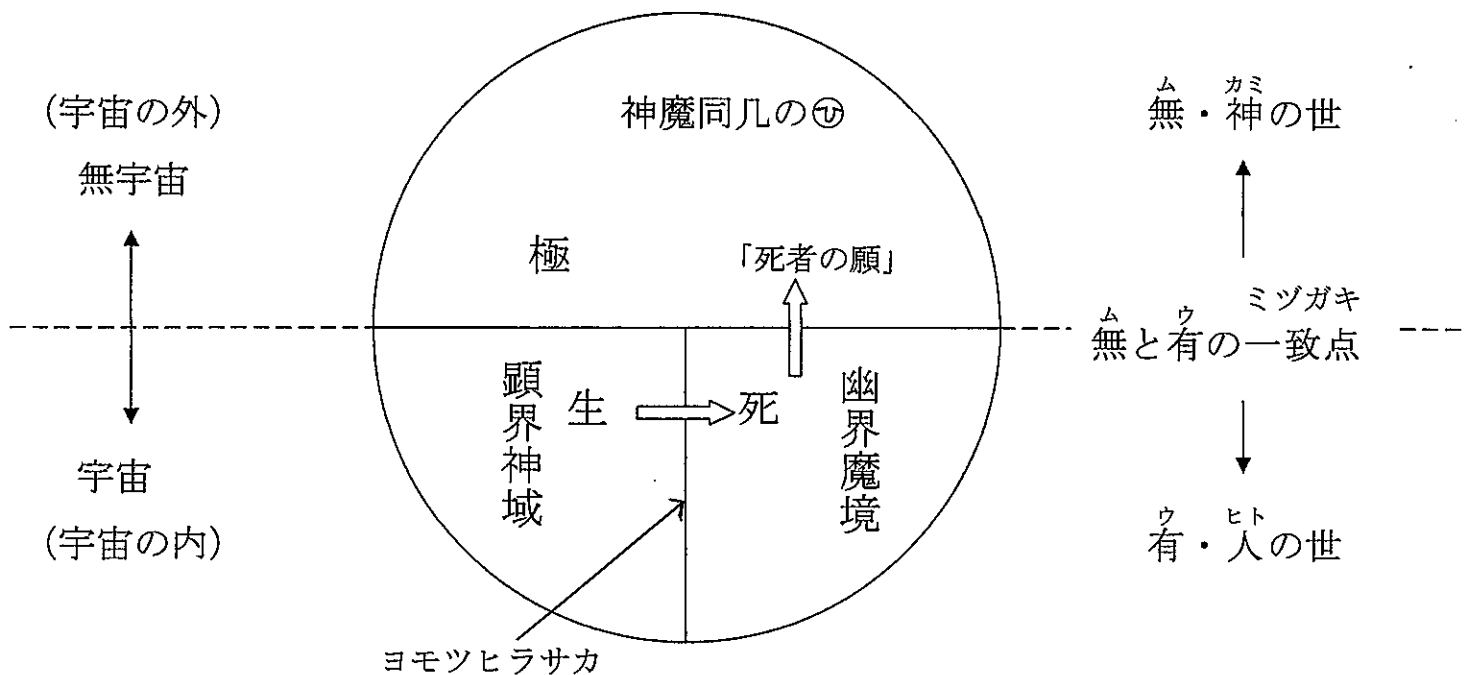
○「^{タカマノハラ}高天原」は狭義では「アマツカミの領域」を指す。

○現実には、「クニツカミの領域」は、顕界神域 (カミの領域、狭義の^{ナカツクニ}中津国) と幽界魔境 (マガツビの領域、^{ヨモツクニ}黄泉国) とに分かれている。

(第一版を参照)

死者の願ひ

「㊦の教へより」



1 頁下段 「人間的身心の明らめ難き〇」とは、

『無宇宙の零は、人間の身では明瞭に認識することが極めて困難である』
という意味。

仮に〇と表現しているが、この同じ実体を、「種子」としては㊦と描き、
「その㊦のままに築かれた箇体」を㊦と表現する。

2 頁上段 「無と有の一致点」

上の図では、宇宙と無宇宙とを合わせて一個の円で表現してしまっている
ので、図象としては「一致点」ではなく、「境界線」になってしまっている
が、これは単なる表現上の問題であって、何ら本質的な差異ではない。

斯くて、人天万類の種子は、如是の ㊦なる神であるから、それは、正でも邪でも、善でも悪でも、美でも醜でもない。それ等総べてを発現し得べき「伊邪那岐・伊邪那美」である。

それ故、此の種子と、此の種子から発芽し育成した総べてとを、「神魔」と呼ぶことが出来る。即、「陰陽であり、乾坤であり、天地で、男女で、雌雄で、凹凸で、悲喜で、哀楽で、卑高で、明暗で、昼夜で、乾湿で、必竟如是である」。之を「這箇」と古人が呼んで居る。

此の「這箇」とは、本来空なのだから、時として、処に依り、狐も出れば狸も躍る。さうしてそれが、狐は狐だと自覚し、狸は狸だと自認すれば、そのままに善美正誠だが、その狐や狸やが、若しも、我は人だと云ふならば、直に醜惡邪曲であり、従つて世を毒し人を迷はす。

なにとぞ、狐狸は狐狸らしくして、人の真似は為ないやうにと切望する。

庶幾はくば、雜糅なる神魔を剖割して、普ねく同凡に在らしめたい。

「神魔を剖割する」とは、善惡美醜正邪曲直を判別するので、「同凡に在らしめる」とは、剖割されたる神魔をして、相互に相互の位置分限を干犯冒瀆することの無いやうにするのである。その暁を讃嘆して、日本古典は「天地初発」とか、「天地初判」「天地剖割」「天地開闢」「天成地定」などと教へられたのである。

之を箇人の上で言ふならば、「直日開發」で、「日神生誕」である。

さうすると、物と云ふ物一切の牆壁が無くなる・境界が撤去される。それは、大宇大宙そのままであるが故である。真なる學問とは、之を目標として出発したもので、真摯なる学徒は、亦必や此の自覚を持つべきである。然うして、その「境界牆壁の無い」とは、火であり、光である。数で云へば零であり一である。日本古典は、

と思ふので、言ひ換へると、宇宙本來、「マ」と「マ」との聚散離合で、その外なる物としては無いのである。

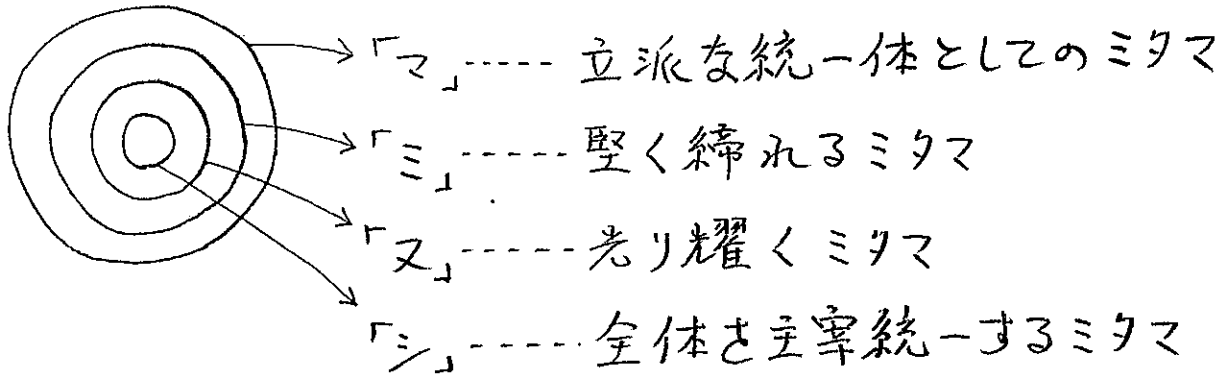
ところが、古事記に、コトアマツカミ別天神と記されたのは、カクリミ隠身と教へられたるとほり、ス澄み清みてス明み極りたるの義で、
極を示したのであるから、○ヒであつて、神ならざるの神とか、宇宙の外に在るの神とか稱ふべき「アマ」である。

其のやうな別天神コトアマツカミたる天御中主神・高御産巢日神・神産巢日神の高天原を説明する詞として、古事記は、「天地初發」と記したのである。それ故に、此の四字が、日本語の「アマ」に當るので、古事記巻頭の「天地」は、
アメツチの漢字ではない。之を、本居風に書けば、「天地初發はアマてふ漢文字なり」と成る。

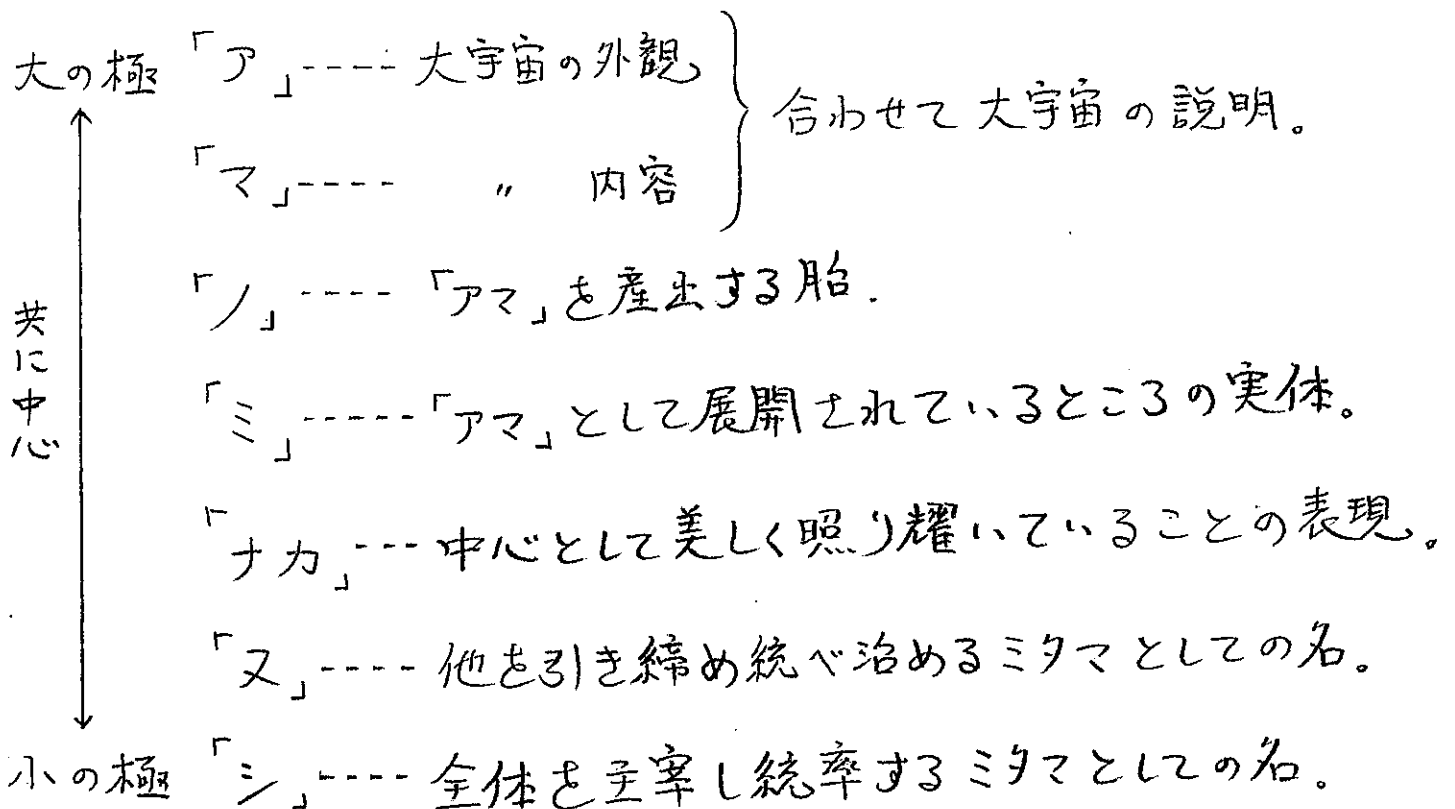
テンテシヨハツソレハタカマノハラ「天地初發・高天原」と續けては、「アマノミナカヌシノオホミカミ」と稱へまつるの義に當る。則、皇天皇土で、大平等海と説明することの出来る一圓光明の火の海で、虚空である。都べての極を教へたのであるから、大の極で、小の極で、一切合切の物の極で、唯一超絶の○ヒで、無經無緯で、無際無涯、無邊無限で、無始無終、無生無死の火で、燃ゆる火で、また光る日で、重重無盡又無量の圓光で、然もそれは、唯一點である。と云ふやうに説明はするが、さて之を、古事記の上だけで知らうとしても、それは容易でない。日本記と對讀すれば、稍分り易い。「乾道獨化・純男・罔象女」とか、「居於虛天而生兒」「一物在於虛中」とか有るのが、其の一例で、之等は皆共に、火の海たる大平等海裡の生死起滅を教へて居る。

それよりもなほ解り易いのは、アメノミオヤアメユヅルヒノアマノサギリクニユヅルヒノクニノサギリノミコト「天祖天讓日天狹霧國禪日國狹霧尊」とある舊事紀の傳へである。ところが、舊事紀をば、「後人の偽り輯めたる物にして」「卷卷の目などもみなあたらず、凡て正しからざる書なり」「乾坤などいふことは皇國になきことにて、その古言なければ、古傳説に非ること明らけし」と、宣長は言つて

川面流-----すべての統一体は「マ・ミ・ヌ・シ」の四重構造
を成している。(191頁～192頁)



多田流-----「大の極」と「小の極」は共に「中心」である。



⇒「アシ」の秘言。「ウマシアシカビヒコダ」の産魂言。

六 鴨の寄りつく島で、海上はるかに遠い島。
「た」は「にあら」の意。

七 わたしが共寝をした。

八 世の尽に。生涯の極み、一生の間の意。書紀の一書には「沖つ鳥鴨著く島に我が率寝し妹は忘らじ世のことども」とある。さて右の二首について、書紀の一書には「凡此贈答二首、号曰『挙歌』」とある。挙歌(きよたか)は歌曲名。

九 記伝に「此高千穂は霧島山を云なり。書紀に襲之高千穂峰ともある、襲は大隅国なれば、是霧島山をも高千穂と云し証なり。」とあるが、明らかでない。

一〇 五百八十年。

一一 書紀に「彦火火出見尊崩。葬日向高屋山上陵。」とある。薩摩国阿多郡にも大隅国肝属郡にも鷹屋郷がある。

一二 新撰字鏡には姨母に「平波」の訓があり、和名抄には「唐韻云、姨、母之姉妹也。」とある。

一三 書紀には「彦五瀬命」とある。記伝には嚴(ごん)の意としているが従いがたい。未詳。

一四 書紀には「稻飯命」とある。この字義通りであろう。

一五 書紀の本文には「三毛入野命」、同一書には「三毛野命」とある。記伝には御食主(みけぬし)の意としているが未詳。

一六 神武天皇。大和に遷られてからの命名である。書紀の一書には「次狭野尊、亦号神日本磐余彦尊。所稱狭野者、是年少時之号也。後撥平天下、奄有八洲。故復加号、曰神日本磐余彦尊。」とある。

一七 波頭。

一八 海のあなな極遠の地にあるとこしなえの齡

ここまでは、
あくまで神話である。

赤玉は 緒さへ光れど 白玉の 君が装し 貴くありけり

といひき。爾に其の比古遲(ひこぢ)を以て。答へて歌ひたまひしく、

沖つ鳥 鴨著く島に 我が率寝し 妹は忘れじ 世のことごとくに

とうたひたまひき。故、日子穗穗手見命は、高千穂の宮に伍佰捌拾歳坐しき。

御陵は即ち其の高千穂の山の西に在り。

是の天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命、其の姨玉依毘賣命を娶して、生みま
せる御子の名は、五瀬命。次に稻氷命。次に御毛沼命。次に若御毛沼命、亦の
名は豊御毛沼命、亦の名は神倭伊波禮毘古命。故、御毛沼命は、波の穂を跳
みて常世國に渡り坐し、稻氷命は、妣の國と爲て海原に入り坐しき。

第十一節

神魔同凡の火を、神代の神は、天御鏡と稱へ、其の主神を少名比古那命と教へ、其の國を鏡之船と呼び、大國魂神とも讃へ、白玉晃耀の神界なればとて、古典には、「白き装束爲したり」と傳へて居る。之を又單に「御鏡」と稱へて祕事傳承の祕言と爲たのは、日本民族の神言に依るのである。

「ミカガミ」のミは、實であり、身であり、稔であるが、此の詞は、主として數理に因るので三である。此の三は、一を生ずるの身で、二の結びたる實で、産靈産魂たる身で、子孫を産出し育成すべく稔りたる者で、「ミトシスメカミ」と稱へまつる齋庭の穗にてまします大年御魂神と仰ぎまつるのである。

その神の「ヒ」の何如に照り耀けることよと讃仰しまつると共に、その神の内容を教へ給へる「天御鏡・鏡之船」。その神の火の何如に威烈オソロしきかを、火神は教へ給ふのである。

第一節に、「白雪は碧波を潛り」と記したのは、鎮魂裡の事相を示して、體得の便宜にもと願つたのである。

鎮魂殿裡神魔剖割。古老嘆云天地初發。之是天成地定高天原現成而。神聖生其中也。阿那畏。

人に語るべからずと誡められたる祕事なれども、其の一角なりとも提示して、共學研鑽の一助にもと願ふのである。が、然しながら、婆子の饒舌却つて人を誤ること無きかと虞る。

人間の行路は、多岐又多端である。多端多岐ではあるが、窮極に到れば○である。

此の○が○のままに結び結べば神代の神と仰がるるのである。

おほそらは、はれにはれたり。あしたづの、ちややちよと、あまぢゆくこゑ。

(タイ)

と云ふ歌があるので、之を借りて、此の境を説明する一助と爲よう。

神代の神とは、「隠身」と古事記の傳へたところで、之を「コモリミ」と礫稻綺道秀先生オタギミチホから學んだが、コモリミとしては、いまだ天降り坐さざる別天神なりとの義で、鏡之船に身籠り居坐すの義で、それは、「澄み清スみて明み切りたる」○海ヒノウミである。

人の身として之を仰げば、「カクリミ」にてまします。先師の「ミタママツリ」に、經無く緯無く始無く終無しと稱へたまへる「球體」である。球は是體。體は是球。

皆人が専心一意、天御中主大神アマノミナカスミノオホミカミの大御名を奉稱しつつあれば、其處に天地は發け、其處に高天原は明けて、主の神を拜みまつるべきである。其の主の神は、御一柱としては、天之御中主神アメノミナカスミノカミと稱へまつられ、御三柱としては、天之御中主神アメノミナカスミノカミ・高御産巢日神タカミムスヒノカミ・神産巢日神カミムスヒノカミと稱へまつらるるのである。

あめなるや、あまのいはやど。こもりみの、かみのみすがた。くすしかも、あやしきかもな。ひふみよと、うけふみたれば、いつむゆな、やよここのへの、かみしらす。きみがまろやは、うちとみな、すみにすみたり。すみすみで、すみきりたれば、かくりみの、かみにこそませ。ひふみよい、むゆなやこなる。なりなりて、なりあはざるを、ふるべゆら、ゆらとをふるべ。ひふみよい、むゆなやことと、なりなりて、なりあまれれば、ひとことの、かつらぎぬしや、ほむすびの、むすぶかみわぞ、てりにてりたる。

先師の全集十卷、無慮八千頁。然れども、此の「體」を傳ふるもの僅に數言。爲に讀者往往此の祕言を看過す

① 幸187頁 のりと

あめなるや～
こもりみの～

コモリミ＝カウリミ

コトアコツカミ

ヒツヨ と うけふみたぬは

アマツカミ

(ヒカミ)

イツムエナ ヤヨコノヘ～

ヒツヨイ
ムコヤコ なる

ヒツヨイ
ムコヤコト と

なりなりて
なりあはむさ

(イザナミ)

なりなりて
なりあまぬは

(イザナギ)

ほむすびの
むすぶ神輪を
てりにてりたる

ク＝ツカミ

(クツカミ)

るものの如くである。今之を記すもまた婆心。若幸に便宜を得る人も有らば、ひとり予の喜びのみではない。

第十二節

經も無く緯も無く、始も無く終も無しとは、物無きものである。之を古老は、「火」と教へて居る。その歌に、燃ゆる火も、取りてつつみて、ふくろには、入ると言はずや。さともなきに。と有る。

之は「ミタママツリ」の祕言で、之に依つて、日本民族が死者を葬るには、如何なる祭式を用ゐたかがわかる。往く人の、心知れば、かにかくに。とく歸りませ。いつかしがもと。

と傳へたのも、亦等しくそれである。

先師は、御尊母を葬りまつるに、其の初眞宗佛式に依られた。

それを見て、脩禊の同人であつた栃木縣の神職伊藤条三氏が激怒し、遂に稜威會を脱退した。惜しいことをされた、私は今でも時時想ひ出すのである。近頃でも、氣の早い人たちが、自分の知らぬことを他人が爲れば、深くも究めず、親しくも聞かずに、漫然と罵聲を揚げたり、卒然と嘲笑を放ちたり、道に志すものの斷じて爲すべからざる輕浮盲動を爲て居るさうだ。

そのやうな人は、天鳥船神の發聲を忘れてでも居るのか、少くとも怠つて居るのであらう。早く反省して、日夕二回の拜神を勵み、神の御聲の中に、各自各自の日を明にすべきである。

「古典トハ神代紀ニシテ、人間身出生以前ノ記録ナリ。

出生以前ナルガ故ニ、人ニアラザルナリ。人ニアラザルガ故ニ、死後ニテモアルナリ。死後ニシテ、出生以前ニシテ、人ニアラザルモノトハ、神ニシテ、魔ニシテ、神魔ニシテ、死者ニテモ生者ニテモアルト共ニ、生死ノ無キモノナリ。

生死ノ無キ中ニ在リテ、生死ヲ執持スルハ、人ニシテ魔ニシテ、生死ノ有ル中ニ在リテ、生死ヲ脱却シタルハ、神ニシテ神人ニシテ惟神ナリ。」

是れは、人の「イノチ」が、人としての一期生死には拘はらず時間の限り空間の限り、その「限りの無き限り」「還り変り流れ行き返り来たる」のであるとの意である。

之れが、人天万類の常態なので、「限り無き生命の波」だと、人間的には説明をする。けれども、それで判るかどうか、時間を認め空間に制せられて居る人間世界は、まことに不便なので、どう説明したならばよいか。

「神代には牆壁が無い。」

人として牆壁の間に生れては来ても、神の賜ひし人であるからには、その牆壁を撤去して、一円晃耀の「○」と成り「◎」と成ることは出来る。それを古老は「死生解脱の暁」とか「天成り地定りて神聖生れます」とか教へられたので、それは則、玉の緒を結び結びて、神界樂土を築き得たのである。

雨霽れて風凪ぎたれば、一言の葛城主は、善しとこそ宣れ。

まことに此れ是の零境、「一」にして二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九にして十にして一となれば、一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 四段 七段 神輪ながらに」と、古

老は説明された。

天照大御神とも天照皇大御神とも天照坐皇大御神とも大戸日別神とも大日靈貴尊とも称へたであらう。と共に、^{ヒノカミ}◎だと称へられたのでもあらう。それは、その人相応であるから必しも一定はしない。昔の猶太人は太陽の炙灼たる威烈をひどく恐れ畏みて「火」と称へ「エホバ」と仰ぎその称名をすら憚られた。さうしてそれはまた地獄の火」でもあつた。そのやうな怖畏の信仰はエホバに捧ぐる燔祭の犠牲を怠らぬやうにつとめた。

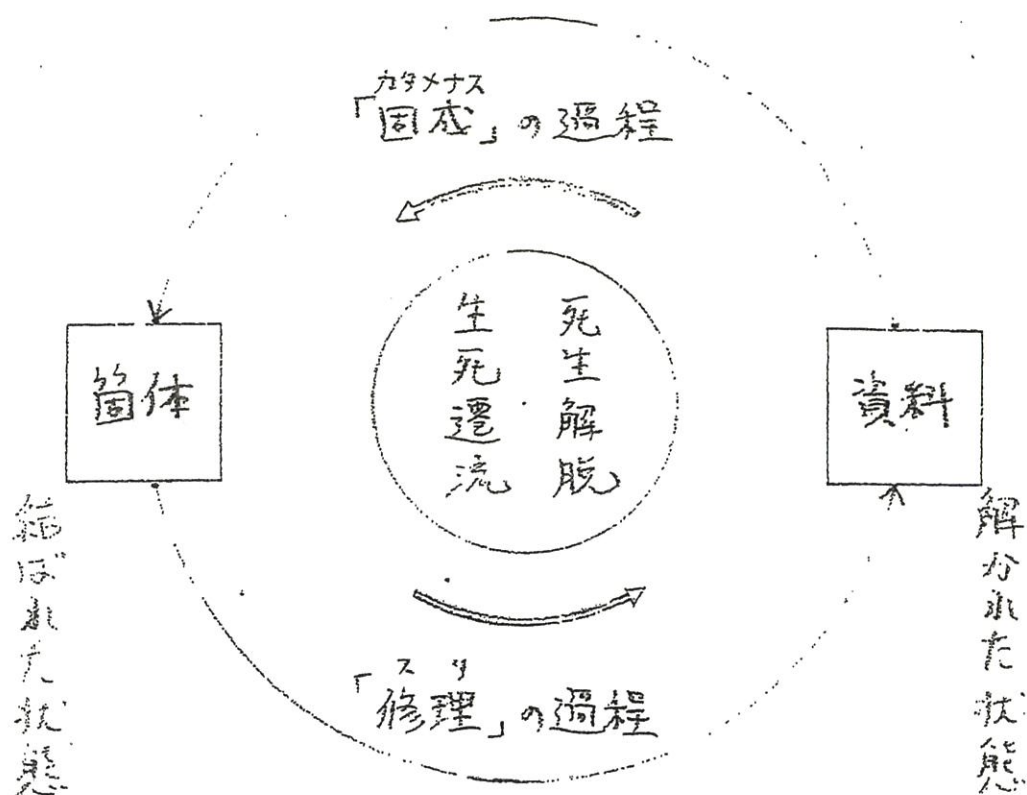
「怖畏の信仰」は劫火を恐れ洪水を恐れては火を祀り水を祀りてその心を和げ怒りを避けんことを願ひ、死を恐れては「^{サヤリマスヨミドノカミ}塞坐黄泉戸神」を祀られた。

極一

「サヤリマスヨミドノカミ」とは黄泉津平坂を守る神ではあるが、また是れ、死生解脱の一線で一点で無で零に否で非で非否である。ところで、此の一点を古来東西各地で皆共に火と呼んで居る。地獄の火で餓鬼道の火で盲生道の火で修羅道の「火」で三千大千世界焚尽の劫火である。地底にありては劫火と呼ぶが天界浄上に在りては日と讃へ◎と仰ぐ。

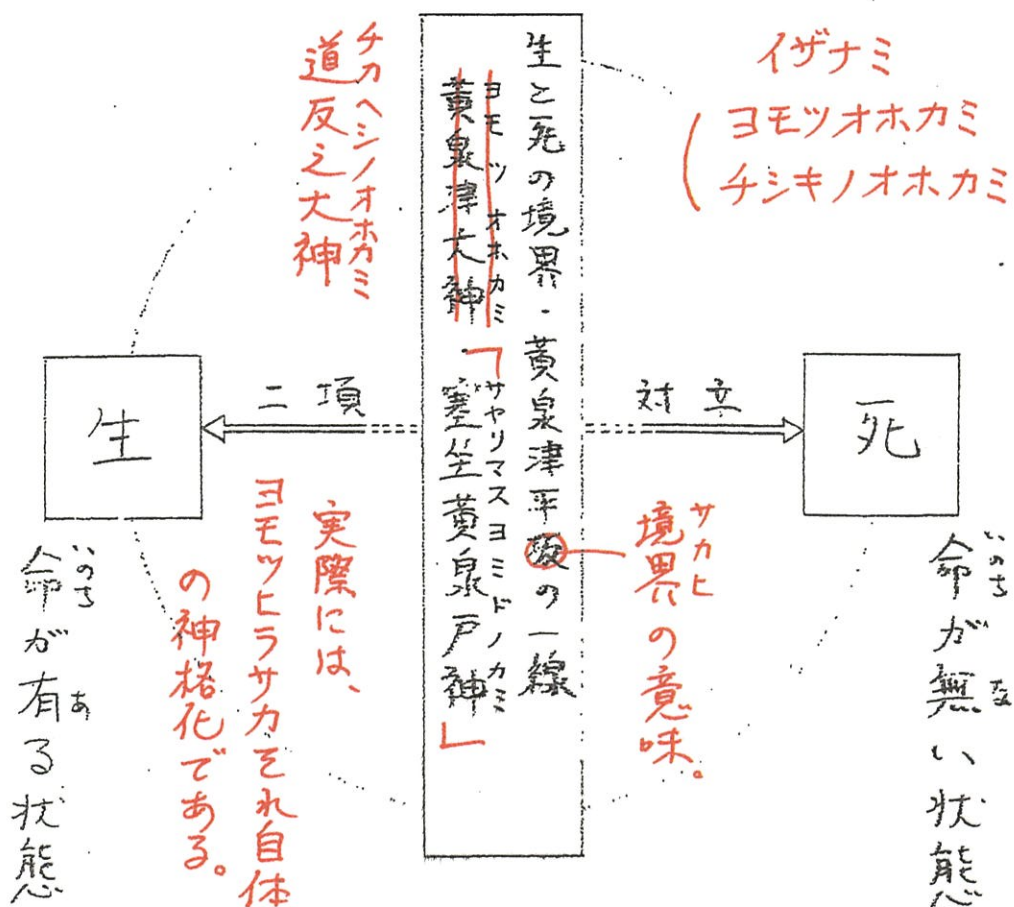
アラシホノ、シホノヤホデノ、シホツチノ、シホノシタタリ、ヒトシリテ、クニコソキヅケ、コロロ
コロロニ。

より高次の意識状態における一元的認識
(限りなき「イノチ」の果てしなき循環)



----- (直日の開発 -- ↑ -- 境界の撤去) -----

通常の意識状態における二元的認識
(「生」と「死」の永遠の二項対立)



て何時何処で何のやうにしてその「極」を明らめ得ないとは限るまい。

そこに「大宇宙究明の希望」が繋かれる。「大の極」と「小の極」と「大小超絶の極」と「個個分分の極」と色色に言ふことは出来ても、結局、「極」の「極」の「窮極」は「唯一」^{タダヒトツ}であらう。といふやうに人の身としては想像する。大の極としても「唯一」。小の極としても「唯一」。大小超絶の極としても「唯一」。その「唯一」なるを、古老は、「山中無人之人」と称へて、日本語では「カミ」とも「ミコト」とも仰ぐのだと教へられたのである。

「カミ」とは「陰陽」^{メオ}の義であり、「ミコト」とは「ヒフミ」の義で、「一二三」と数へて、一であり二であり三であり、一二三である。さうして、一でもなく二でもなく三でもないのだから、人間の計算には上らないところの秘数である。

すると、「唯一」といふのも人間の便宜で仮に名づけたままで事実としては存在しないのである。けれども、その「存在しない」と云ふこともまた決して事実とは思はれぬ。それならば、その事実は何うなのか。それは、有るやうでもあり、無いやうでもある。無いものなのか。有るものなり、無いともなるものなのか。

然り。然り。

人はその「自己の在る」ことに依つて、また、「自己の消散する」ことに依つて「有る」とも「無い」とも認めるのである。「有る」でもあり、「無い」でもあるのである。

人間として「在る」時には「有る」のであり、人間身を解き去れば「無い」のである。その「存在の世界」を

「豊葦原^{トヨアシハラ}」と呼び、その「存在せざる世界」を「黄泉^{ヨミ}の国^{ツヒラサカ}」と呼び、その「有無の境界線」を「黄泉津平坂^{ヨミツヒラサカ}」と呼ぶ。その黄泉津平坂の坂本で、伊邪那岐命伊邪那美命二柱神が「千引石^{チヒキノイハ}」を間にして一柱づつに別れられた。その「千引石」は表から観れば大磐石であるが、裏から観れば「平坂」なのである。平坂とは坂ならざるの坂で、平地ならざるの平地である。が、さて、「平な坂」などの有るわけが無い。それで、神代紀には「ヨモツヒラサカと云ふ処^{トコロ}の有るのではない。臨終に息の絶ゆる際^{アヒダ}を謂ふのであらう」と記してある。まことに、生死の境界は表観すれば大磐石で裏観すれば平坂で、唯その見る位置から様子の別なまでである。それだから「唯一」と呼ぶところの「極」は有るやうでもあり、無いやうでもあり、有るともなり、無いともなるから「零」と呼ぶ「〇」と描く。

之れをまた「海神^{ウタツミノイロコノミヤ}鱗宮^{ハコ}」とも伝へてある。それをまた天界では「高天原^{タカマノハラ}」と呼ぶ。名はさまざまだが共に「神人出生の故郷^{フルサト}」である。故郷篇の第一に挙げて置いた「ホヲリノミコト」が「シホツチノオチ」の「マナシカタマ」の小舟に乗つて海底に沈み、怜き道を歩いて「ワタツミノミヤ」に行かれた。その道は「イザナギノミコトが黄泉国から逃げ帰られた」と同じ道で、その到り着いた井上の「香木^{カツランキ}」とは、ヨモツヒラサカで云ふ所の「坂本の桃果^{サカモトモモ}」である。今、それを断言するわけは、共に神人出生の秘境だからなのである。此の秘境には、「三神^{ミカミ}」靈が住んで人天万類生殺与奪の神権を執り行はせられるのだ」と、之れは「シホツチノオチ」の御教で「マナシカタマノ秘神^{ヒミカミ}カカリ」である。それを、「死生観」には「人間身裡日月運行ス」と教へて、人の身の神と成るべきわけを示されたのである。

よしの山、よしとこそ見れ。よの人の、よしと選びて、越え行くからに。

第三 香木カツラノイツミの井泉

在る限り在らん限り一切合切を名づけて「大宇宙」と呼ぶ。唯一の存在で増減も消長も無い。然るに。人天万類がその中で生死変転出頭没頭し悲喜苦楽を演出して居る。その様を眺めて怪奇異霊の神魔殿だと言ふ。その神魔を「三神二靈ミハシラノカミ」と名づけて人天万類生殺与奪の神権者である。その亦の名を「八種雷神ヤクサンイカヅチ」とも呼ぶは黄泉魔境に生りますナが為であり、亦の名を「黄泉津大神ヨモツオオカミ」と称へまつるは死生解説の秘鍵を掌握し給ふが故であり、亦の名を「神御産巢日御祖命カムムスヒミオヤノミコト」とも讃へまつるは万有の祖神ミオヤだからなので生者から仰ぎ眺めての御名であり、亦の名を伊邪那美命と讃へまつるは万有産出の母胎にてましますが故である。その母胎を出で万有は生死遷転を繰返す。

けれども、その母胎だとは人間的に見て産出者だと思ふからなので半面観であるに過ぎない。従つてそれは事実ではない。さればとて事実でないわけでもない。ただ、人間身が万有として対立の存在であるがため総観する神智を失墜し完全に表現する神力を忘却して居るがために「宇宙観も万有観も明瞭ハッキリしない」のである。

ああ。誰か掲ぐるものぞ「大宇大宙一円晃耀ヒの零」。

在る時は有りとこそ見れ。行き行きて行きのはて無く行き迷ひたる。

行止進退唯是正。正誠正義神国築成。之是日本神道伝。

「神代紀要」には此の秘を次ぎのやうに教へてある。

「天地ヲ剖タズ、陰陽ヲ分タザル幽鬼妖魔ノ群団ヲシテ、高天原ニ帰ラシムル神事ヲ、日神事ト称シテ、天地剖割ノ秘事ナリ。此ノ秘事ヲ仰グ時ハ、天地自開ケテ、神魔亦別ルルナレバ、日月ハ昭昭トシテ、幽鬼ハ化シテ三神ニ從ヒ、妖魔ハ變ジテ二靈ニ属ス。大道ハ坦坦トシテ、白玉光底ニ泉声ノ潺湲タルヲ聴キ、一線脈脈トシテ、天津金木ノ太邇邇タルコトヲ悟証スベキナリ。之レヲ、八種雷神生リマセリト古典ニ伝ヘ、幽鬼妖魔ノ化シテ、神界樂土ヲ築成スベキコトヲ教ヘタリ。」

幽鬼ニアラザレバ幽鬼ヲ知ラズ、妖魔ニアラザレバ妖魔ヲ弁ゼズ。幽鬼妖魔ヲ化育セント欲セバ、幽鬼妖魔ニ依ラザルベカラズ。神ト化リタル幽鬼妖魔ニシテ、始メテ撥乱反正ノ大業ヲ建ツベク、天国淨土ヲ築成スベキナリ。之レ祖神ノ垂示ニシテ、此ノ土此ノママ高天原ニシテ、此ノ身此ノママ神人ト化ルベキ大道ナリ。」と。

此の大道を唯一筋に行くならば「湯津香木繁れる井」にその影の映るを見て驚くであらう。古老が此の間の消息を詠嘆したまへるを古今和歌集の選者が拾録してある。

ささのくま、ひのくまがはに、駒止めて、しばし水かへ。影をだに見む。

之れを「天真名井の水」と伝へて神聖生誕の秘境である。

その神聖を日本書紀には「国常立尊」と伝へ、旧事本紀には「天祖にして天譲日天狭霧国禪日国狭霧尊」であると伝へてある。それを

神代紀要には「祖神垂示ノ大道ハ、神魔ヲ剖判チテ神魔ヲ隔テズ、天地の開闢キテ天地ヲ統治ス。故ニ統一魂神ナリ。明津神ナリ、荒人神ナリ、荒身魂神ナリ、現神ナリ。天壤無窮ノ日本天皇ニテマシマスナリト仰ギマ

ツルナリ。」と記してある。

ああ。誰か掲ぐるものぞ「大宇大宙一円晃耀の零」。
天壤無窮の旗。

神代紀要には更にその神旗の霊徳を讃美して曰く。

「日本天皇ノ大道ハ如斯ニシテ、太平嘉悦ノ皇土ヲ開キ、万類万物ヲ安養化育シ給フ。」と。ああ。誰か掲ぐるものぞ「大宇大宙一円晃耀の零」。

以上 昭和廿二年極月極日

第三章 終

第四章 十字架^{カミノナゲキ}の嘆声

氓口民生岐路多。神界妙光何時到。天照赫灼人不知。窟裡魔境妖類嘲。

「それが人間の世界なのでせう」と甥が伯母に話して居る。

此の伯母は六十一歳で東京から田舎家に疎開したのだが、四隣の喧噪が激しく破廉耻漢の横行して偷盗、邪淫、妄語、などと不義無道が白昼^{マッビルマ}に公公然とのさばつて居るのに驚き呆れ、これはまるで鬼畜の世界だと嘆息したのを、二十歳になる甥が異論を述べたのである。

まことに、此の娑婆を人間世界と呼ぶならば、慥に日本国家の現況は餓鬼であり畜生であり修羅であり、さうして地獄であるところの人間世界である。

第三 香木の井泉カッラノイツミ

在る限り在らん限り一切合切を名づけて「大宇宙」と呼ぶ。唯一の存在で増減も消長も無い。然るに。人天万類がその中で生死変転出頭没頭し悲喜苦楽を演出して居る。その様を眺めて怪奇異霊の神魔殿だと言ふ。その神魔を「三神二靈ミハシラノカミ」と名づけて人天万類生殺与奪の神権者である。その亦の名を「八種雷神ヤクサノイカヅチ」とも呼ぶは黄泉魔境に生ナりますが為であり、亦の名を「黄泉津大神ヨモツオオカミ」と称へまつるは死生解説の秘鍵を掌握し給ふが故であり、亦の名を「神御産巢日御祖命カムミムスヒミオヤノミコト」とも讃へまつるは万有の祖神ミオヤだからなので生者から仰ぎ眺めての御名であり、亦の名を伊邪那美命と讃へまつるは万有産出の母胎にてましますが故である。その母胎を出で万有は生死遷転を繰返す。

けれども、その母胎だとは人間的に見て産出者だと思ふからなので半面観であるに過ぎない。従つてそれは事実ではない。さればとて事実でないわけでもない。ただ、人間身が万有として対立の存在であるがため総観する神智を失墜し完全に表現する神力を忘却して居るがために「宇宙観も万有観も明瞭ハッキリしない」のである。

ああ。誰か掲ぐるものぞ「大宇大宙一円晃耀ヒの零」。

在る時は有りとこそ見れ。行き行きて行きのはて無く行き迷ひたる。

行止進退唯是正。正誠正義神国築成。之是日本神道伝。

未来78頁の解説図

有限限りならん限りの一切合切を名づけて、こう呼ぶ。
 (この中で、人天万類は生死変転、悲喜苦楽を演出しているの、それを、また、こうも呼ぶ。)

大宇宙

とは、

怪奇異霊の神魔殿

であ

アミイナカヌシカミ (古事記の序より)

ツクムカヒノカミ ハシラノカミ イサナダノカミ
 カミスビノカミ 三神二霊 ハサナミノカミ

(人天万類生死与奪の神権者)

その神魔殿(大宇宙)の主たる神魔の名は、
 ヌシ カミ

人間身は、それぞれが万有の中の一箇体であり、相互に対立する存在であるが故に、この三神二霊の内容を総覧することができない。(半面ずつ別々に見てしまふ。)

(別名)

半面観の②産出者として見る

半面観の①破壊者として見る

② 神御産巢日神
 (万有の祖神ミヤななので、こう呼ぶ。)

① 八種雷神
 (黄泉魔境に生りますので、こう呼ぶ。)

② 伊邪那美命
 (万有産出の母胎なので、こう呼ぶ。)

① 黄泉津大神
 (死生解脱の秘鍵を掌握しているの、こう呼ぶ。)

「ミハシラノカミ
三神二靈」

三神は造化三神、つまり「アメノミナカヌシノカミと
タカミムスヒノカミとカミムスヒノカミ」のこと。

また、二靈は「イザナギイザナミフタハシラノカミ」のこと。

この超越的実在の別名として、以下の四つを挙げる。

ヤウサノイカツテ
一、八種雷神

ヨモツオホカミ
二、黄泉津大神

カムミムスヒミオヤノミコト
三、神御産巢日御祖命

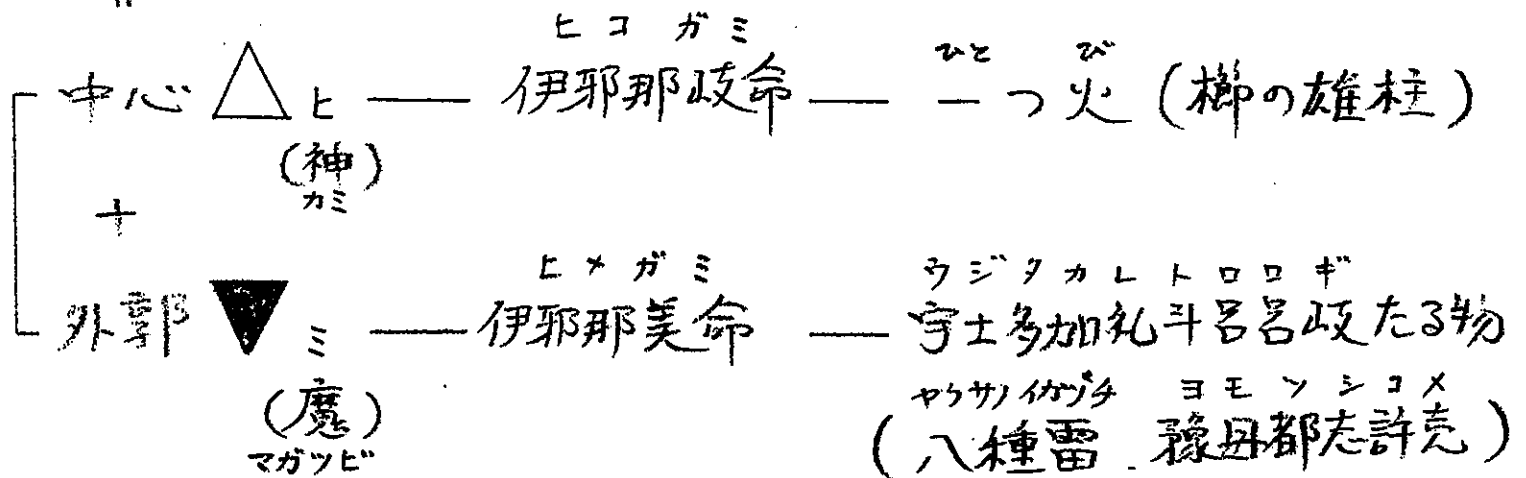
イザナミノミコト
四、伊邪那美命

もちろん、別名は他にも多数存在する。

(言霊の幸 84.87頁のまとめ)

全体  リ

II



外郭 (ウジツカレトロロギたるモノ) はこれ自体としては ^{マガツビ} 魔

だが、中心と正しく組み合わせることによって ^{カミ} 神と化る。

これを「^{カミ ナ} 神と化りたる ^{マガツビ} 魔」と云う。

総称としての「ヨモツシヨメ」(「メ」) (同.205頁より)

{ 母としての「メ」—— ^{ヨモツカミ} 黄泉津大神 (イザナシミコト)

{ 子としての「メ」—— ^{ヤウサカミ} 八雷神 (ヤウサノイカツチ)

天照大御神とも天照皇大御神とも天照坐皇大御神とも大戸日別神とも大日靈貴尊とも称へたであらう。と共に、^{ヒノカミ}◎だと称へられたのでもあらう。それは、その人相応であるから必しも一定はしない。昔の猶太人は太陽の赫灼たる威烈をひどく恐れ畏みて「火」と称へ「エホバ」と仰ぎその称名をすら憚られた。さうしてそれはまた「地獄の火」でもあつた。そのやうな怖畏の信仰はエホバに捧ぐる燔祭の犠牲を怠らぬやうにつとめた。

「怖畏の信仰」は劫火を恐れ洪水を恐れては火を祀り水を祀りてその心を和げ怒りを避けんことを願ひ、死を恐れては「^{サヤリマスヨミドノカミ}塞坐黄泉戸神」を祀られた。

「サヤリマスヨミドノカミ」とは黄泉津平坂を守る神ではあるが、また是れ、死生解脱の一線で一点で無で零で否で非で非否である。ところで、此の一点を古来東西各地で皆共に火と呼んで居る。地獄の火で餓鬼道の火で畜生道の火で修羅道の「火」で三千大千世界焚尽の劫火である。地底にありては劫火と呼ぶが天界浄上に在りては日と讃へ◎と仰ぐ。

アラシホノ、シホノヤホヂノ、シホツチノ、シホノシタタリ、ヒトシリテ、クニコソキヅケ、コヲロ
コヲロニ。

神話と称するものは各國にて
神傳を小説化したるものにして
其の神傳の心を正しく傳へたる
ものと然らざるものとの混淆し
て流布せられつつあるなり。
之れを思ふ。

東天西地南池北溟の理。
所謂良心無きものを北溟の幽
鬼と名づけて□□□□の如き
ものなり。

彼が如きを蛆と呼ぶ。
蛆を教ふるには水を以てす。
水を用ゐて後に火を以てす。
「水火相和して湯をなすを青垣
東山」と稱へて降三世明王と真言
宗の教へたるところなり。

あちめおおお。
之れを「アチメ」と稱し、アチメ
オオオともオオオとも稱するな
り。

而して其の水火とは八種雷に

して妖魔幽鬼の群団なり。

「蛆タカレトロロギ」と古事

記に記したる黄泉津醜女なり。

「フルベユラユラトヲフルベ

ヌナトモモユラ」

閉戸籠居三年有半。

柳暗花明徒匆忙。

飛燕三五西又東。

細雨濛濛堤下村。

アアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

ハルヒヒメハルヒヒメハルヒ

ヒメアアヒガテンジンユウアイコ

ウ。

ウトノミヤシロ。

ウトノカミミヤ。

ウトノミヤ。

ウト。

ウ。ウ。ウ。ウ。ウ。ト。ウ

ト。ウト。ウ。

ヨシ。

神がマガツビを
殺す隙の神言。

ここで言う火は、中心（もしくは経）のこと。
水は、外郭（もしくは緯）のこと。

「無宇宙の傾りにある中心」と「宇宙の傾りにある外郭」とか
ひとつになった「箇体（統一体）」と、ここでは「湯」と表現している。
いわゆる「ヒミリ」と同じ。

④ 中心 — 零神 ヒカミ、通日 ナホヒ。
外郭 — 「マガツビ」、所現 ヲマ



2017.6.6. ①⑥

Date

ここで言う「氷」と「火」は、^{たと}もつゝん、^{たと}喩へである。

それが^{あゝ}相知して湯となす、と言っているのだから。

これは、幸84頁の^{ヒミツ}△▼■（火・氷・湯）のことである。

同頁にあるとおり、その「氷」とは「^{ウジタカレトロロギ}言士多加礼斗呂呂岐たる

^{ヤササノイカツチ}八種雷」であり、「ヨモツシコメ」であり、即ち、幽鬼妖魔の

群団である。また、その「火」とは、イザナギの「一ツ火」で

あり、その群団を外郭として統率すべき中心である。

(ヒ) (ミツ) ^{あゝ} (ユ)
この中心と外郭が相知して統一体と成ることさ

^{あゝがさのひがしりやま}「青垣 東山」と称へて、^た「アタメ」と称する。

その境地を

また、イザナミノミコトはともとも第一階層にまでしが降りて

来ていないのだから、いかに^{ウジタカレトロロギ}「ウジタカレトロロギ」ではいようと、

その^{かばね}屍は、人間の目から見れば^{クシミタマ}奇身魂である。

(図表、神の死と人の死、を参照)

あまが玉のひがしのやま

一方、「青垣 東山」とは、古事記にも登場する用語で

あり、多田流の解釈としては、大國主神が自身の幸魂奇魂

を、大三輪の神・三諸山の神として祭った場所である。

(幸. 268-269頁 参照)

(土)

(水)

この秘語では、単なる地名ではなく、「中心が正しく外郭と

(場)

こと

統率して、統一体を成す」という事それ自体を指して、

この用語を用いている。即ち、幸268頁にあるとおり

『我と我が身(主に、我が幸魂奇魂)を齋りて、

オホミツカラ

此の身このまま神の身たる大御宝と成る』ための

行事を指して、「倭の青垣の東の山の上の秘事」と称する

のである。

が明らかでない。

三 出雲風土記鳥根郡の条に美保埼がある。出雲の国の東北端。「大」はホの仮名。

三 白く高く立つ波頭。

三 「天の」は美称。羅摩は和名抄に「本草云、羅摩子、一名梵蘭」とあって、「加々美」の和訓がある。ガガイモのこと。この実を割ると小舟の形に似ているのでカカミ船といったのである。桃太郎の桃や瓜子姫の瓜と同じ性質のもの。書紀の一書には「以ニ白藪皮ニ為シ舟」とある。白藪はヤマカカミ。

元 記伝には、ここはその神の小さいことを言っているのだから鵝では大き過ぎる。多分「蛾」の誤りであろうとして、ヒムシと訓んでいる。持統紀六年九月の条に「越前国献ニ白蛾。」とある蛾は一本に鵝とあり、これは鵝の誤りらしいから宣長説も捨て難い。また下の仁徳天皇の条に蚕が蛾になることを述べて、「一度為ニ飛鳥」とあるから、鵝は蛾が飛ぶ鳥だということから用いた字か。とにかく本来の鵝では大き過ぎるし、皮というのにも当らない。書紀の一書には「以ニ鵝鵝羽ニ為シ衣」とある。鵝鵝はミソサザイ。

三 全剥で、丸剥ぎに剥いで。

三 大国主神のお供の神たち。

三 谷蟻(タニークク)でヒキガエル(蝦蟇)のこと。ククは蛙の古名であらう。

三 崩え彦の意。崩ゆは崩るの古言。案山子のことである。

三 書紀の一書には少彦名命とある。小男の意か、それとも大ナ・少ナと対称したものか。名義未詳。

7 少名毘古那神と国作り

生める子は、鳥鳴海神。鳴を訓みて、此の神、日名照額田毘道男伊許知邇神。田の下より下邇に至るまで、皆音を以るよ。を娶して生める子は、國忍富神。此の神、葦那陀迦神、那より下の三字は音を以るよ。

亦の名は八河江比賣を娶して生める子は、速甕之多氣佐波夜遲奴美神。多より下は八河江比賣を娶して生める子は、天日腹大科度美神。度美の二字は音を以るよ。此の神、天狹霧神の女、女神を娶して生める子は、天日腹大科度美神。度美の二字は音を以るよ。此の神、天狹霧神の女、遠津待根神を娶して生める子は、遠津山岬多良斯神。

右の件の八島土奴美神以下、遠津山岬帶神以前を、十七世の神と稱す。

故、大国主神、出雲の御大の御前に坐す時、波の穂より天の羅摩船に乗りて、鵝の皮を内剝に剝ぎて衣服に爲て、歸り來る神有りき。爾に其の名を問はせども答へず、且所從の諸神に問はせども、皆「知らず。」と白しき。爾に多邇具久白言しつらく、多より下の四字は音を以るよ。「此は久延毘古ぞ必ず知りつらむ。」とまをしつれば、即ち久延毘古を召して問はす時に、「此は神產巢日神の御子、少名毘古那神ぞ。

岐志麻流美神。此の神の名は音を以るよ。此の神、比比羅木之其花麻豆美神。木の上の三字、花の下は音を以るよ。此の神、活玉前玉比賣神を娶して生める子は、美呂浪神。美呂の二字は音を以るよ。此の神、敷山主神の女、青沼馬沼押比賣を娶して生める子は、布忍富鳥鳴海神。此の神、若盡

女神を娶して生める子は、天日腹大科度美神。度美の二字は音を以るよ。此の神、天狹霧神の女、遠津待根神を娶して生める子は、遠津山岬多良斯神。

右の件の八島土奴美神以下、遠津山岬帶神以前を、十七世の神と稱す。

故、大国主神、出雲の御大の御前に坐す時、波の穂より天の羅摩船に乗りて、鵝の皮を内剝に剝ぎて衣服に爲て、歸り來る神有りき。爾に其の名を問はせども答へず、且所從の諸神に問はせども、皆「知らず。」と白しき。爾に多邇具久白言しつらく、多より下の四字は音を以るよ。「此は久延毘古ぞ必ず知りつらむ。」とまをしつれば、即ち久延毘古を召して問はす時に、「此は神產巢日神の御子、少名毘古那神ぞ。

即ち久延毘古を召して問はす時に、「此は神產巢日神の御子、少名毘古那神ぞ。

即ち久延毘古を召して問はす時に、「此は神產巢日神の御子、少名毘古那神ぞ。

即ち久延毘古を召して問はす時に、「此は神產巢日神の御子、少名毘古那神ぞ。

即ち久延毘古を召して問はす時に、「此は神產巢日神の御子、少名毘古那神ぞ。

戮力一^レ心、經^レ管天下。」とある。

六 海のあなただ極遠の地にあるとこしえの齡の國。書紀の一書には、熊野の御碕から常世郷に行つたとも、淡島に行つて粟莖にのぼつたところが、彈かれて常世郷に至つたとも伝えてゐる。七、記伝に、古今集以下の歌に見える「そほづ」と同じで、案山子のこととしてゐる。

ハ カカシに對する古代農民の信仰をあらわしたものであらう。

九 書紀の一書には「其可^ミ与^レ吾共理^ニ天下^一者、蓋有^之乎。」とある。

一〇 書紀の一書には「于^レ時神光照^レ海、忽然有^ニ浮來者^一。」とある。

二 前は直接に言うことを避けて添えた語で、我をの意。こうした「前」の用例は神に限られてゐるようである。

三 処置する意であるが、ここは祭る意。

三 大和の國の周圍を青々とした垣のようにめぐつてゐる山の東の山。

四 齋き奉れの意。

五 御諸山は三輪山。延喜式神名帳に「大和國城上郡、大神（^{ミコ}）大物主神社」とある。今の大神（^{ミコ}）神社。書紀の一書には「此大三輪之神也」とある。また出雲國造神賀詞には、この神の鎮座に關して「大穴持命の申し給はく、皇御孫の命の靜まり坐さむ大倭の國と申して、己れ命の和魂を八咫鏡に取り託けて、倭の大物主櫛玉（^{タケミ}）の命と名を稱へて、大御和の神奈備に坐せて、云々」と伝えてゐる。

六 以下の系譜は須佐之男命の神裔の條に直接つながるものである。

七・八 名義共に未詳。

九 大は美称、國の御魂

8 大年神の神裔

毘より下の三字は音を以るよ。」と答へ白しき。故爾に神產巢日御祖命に白し上げたまへば、答へ告りたまひしく、「此は實に我が子ぞ。子の中に、我が手俣より久岐斯子ぞ。久より下の三字は音を以るよ。故、汝葦原色許男命と兄弟と爲りて、其の國を作り堅めよ。」とのりたまひき。故、爾れより、大穴牟遲と少名毘古那と、二柱の神相並ばして、此の國を作り堅めたまひき。然て後は、其の少名毘古那神は、常世國に度りましき。故、其少名毘古那神を顯はし白せし謂はゆる久延毘古は、今者に山田の曾富騰といふぞ。此の神は、足は行かねども、盡に天の下の事を知れる神なり。

是に大國主神、愁ひて告りたまひしく、「吾獨して何にか能く此の國を得作らむ。孰れの神と吾と、能く此の國を相作らむや。」とのりたまひき。是の時に海を光して依り來る神ありき。其の神の言りたまひしく、「能く我が前を治めば、吾能く共與に相作り成さむ。若し然らずば國成り難けむ。」とのりたまひき。爾に大國主神曰ししく、「然らば治め奉る狀は奈何にぞ。」とまをしたまへば、「吾をば倭の青垣の東の山の上に伊都岐奉れ。」と答へ言りたまひき。此は御諸山の上に坐す神なり。

故、其の大年神、神活須毘神の女、伊怒比賣を娶して生める子は、大國御魂神。

て居る。建速須佐之男命が、其の中の尾を切り給へば、都牟刈之太刀が在つたので、お取りになつて天照大御神に白上げられた。それが、草那藝之太刀である。

いつも血ある爛れたる八俣遠呂智の尾を切つて得られた太刀は、「甚しく荒びて、岩や草木までが、ことごとく強暴だと云ふ此の國を平和にするには、隨一の神器で、被禊たる氣吹の狹霧としての神にたまはします。その太刀の禊を、五十串の神事として傳へられたのが、石上神宮であり、柳條百五十本と傳へたのは、建御名方富命大衍の祕事である。共に、大日本天皇國・天祖・天神・國神の武道で、伊頭之男建の祕事と稱へまつる。

都牟刈の太刀取り帶ばす吾が大君。氣吹戸主の神輪とぞ知る。

第十五、「大國主神」

「大穴牟遲神は、御祖の命の詔せのままに、須佐之男命の御所に参りましたが、程經て後、須勢理毘賣を負ひ、生大刀と生弓矢と天詔琴とを持つて、其處を逃げ出された。須佐之男大神は、それを、黃泉比良坂まで追はれたが、遙に望み見て、其の持ち出した神器で、汝が庶兄弟どもを追ひ伏せ追ひ撥ひて、大國主神と成れよと詔せられた」「そこで、生大刀と生弓矢と天詔琴とを持ち、八十神を平定して、國作り治められた」とあるから、大穴牟遲神は、天の下の大祓を修め、根の堅洲國の如く堅固に作り成す禊に依つて、大國主神と成られたのである。大國主神とは、葦原中國を統一したる上の御名で、統一魂神との義で、其の曉には、そのまま、唉御魂神としての大穴牟遲神であり、奇身魂神としての葦原色許男神であり、荒身魂神としての八千矛神であり、幸御魂神としての宇都志國玉神である。「拜せて御名は五つである」さうして、其の幸魂奇魂は、「日本國の三諸山に住みた

いと云はれたので、そこに宮を造られて、大三輪之神と祀られた」のであるが、「少名比古那神が、常世國に渡られたので、大國主神が、吾獨では何うして此の國を作ることができようかと嘆かれた。時に、海を光^{テラ}して來られた神の言^{ノタマ}ふには、我が前^{ミマヘ}を治めよ。それならば、共與に作らう。若、然うでなければ、國は出來ぬであらう」「その治めまつらんさまは、倭の青垣東の山上に、齋きまつれ」「此は御諸山の山の上に坐す神である」と傳へてあるから、大國主神の幸魂奇魂なる大三輪神とは、他ではない。即、少名比古那神であることがわかる。

省れば、我を教ふるものは我であり、我を導くものも我である。神としての我である。神としての我は、大穴牟遲であり、少名比古那であり、葦原色許男であり、八千矛であり、宇都志國玉であり、大國御魂であり、また、大國主である。その御名^{ミナ}は、その神^{カミノ} 德^{ミノリ}に依りて、百千萬^{モモチヨロツ}と發き開くのである。

第十六、「須勢理毘賣」

「須佐之男命^{スサノヲノミコ}の女^メ須勢理毘賣^{スセリヒメ}は、大穴牟遲神の來られたのを見て、目合^{メアヒ}し、相婚^{ミアヒ}ましてから、其の父の大神に、いと麗はしき神參り來ませりと白し上げられた」とあるのは、人倫でもなし神事でもないやうだが、「根堅洲國に來られた大穴牟遲神を見て、いと麗はしと賞で讃へられた。それが、彼の國に在りては、則、目合であり、相婚である。其の目合と云ひ、相婚と稱するものは、禊の行事として、海に入り、「中津瀬に降り迦豆伎滌がせ給ふ」「水底に・中に・水上に、各其の神の生れます」とあるのが、此の祕事の傳へで、猿田毘古神^{サダヒコノカミ}が、海に溺れた時に、「底度久御魂^{ソコドクミタマ}・都夫多都御魂^{ツブタツミタマ}・阿和佐久御魂^{アワサクミタマ}と化した」のと同様に、根堅洲國の禊をば、「須勢理毘賣」と稱へまつる。それは即、葦原中國平定の神器たる天詔琴でもあり、生太刀でもあり、また生弓矢でもある。で、それ等を得たる曉には、統一魂神としての大國主神であり、大國魂神である。

之を、須勢理毘賣の禊と呼ぶのは、^{ミヅ}滋潤の禊であり、^{ミヅ}水の禊であり、^{ミヅ}氷の禊である。との義で、朝廷大祓の神儀に、「瀬織津比咩神・速開津比咩神・氣吹戸主神・速佐須良比咩神。持ち佐須良比失ひ」とある。その祓の裏なる禊祭として、大國主神の神事の成り成るが故である。

尙、言ひ換へると、根國に入られた大穴牟遲神が、^{ミヅ}經としての稜威であるのを、^{ミヅ}緯である^{ミヅ}滋潤としての須勢理毘賣が、受け入れて、神界樂土を築き得たので、「須勢理毘賣の禊」と稱へまつるのである。

此の神事を脩し得れば、最初に、^{ミヅ}顯幽兩界を劃する緯の一線を認め、次ぎには、^{ミヅ}兩界を貫き通す經の一線を認むることが出来る。^{ミヅ}緯の一線は、^{ミヅ}天地を分つもので、^{ミヅ}色無く幅無き線である。けれども、人の目には、^{ミヅ}光る線であり、^{ミヅ}五彩七色種種様様の象として認め得るのである。^{ミヅ}經の一線は、^{ミヅ}無限の幅を有するのだが、^{ミヅ}人の目に認めては、^{ミヅ}緯の線と等しき幅であり、^{ミヅ}色である。さうして、^{ミヅ}經にも緯にも、無限と思はるる長さを示す。之は、水中の脩禊行事に於て最知り易い「^{ミヅ}ミヅ」の神傳である。

禊に水を用ゐる理由が此處に存る。

祓禊の行事には、必、水を用ゐねばならぬ。

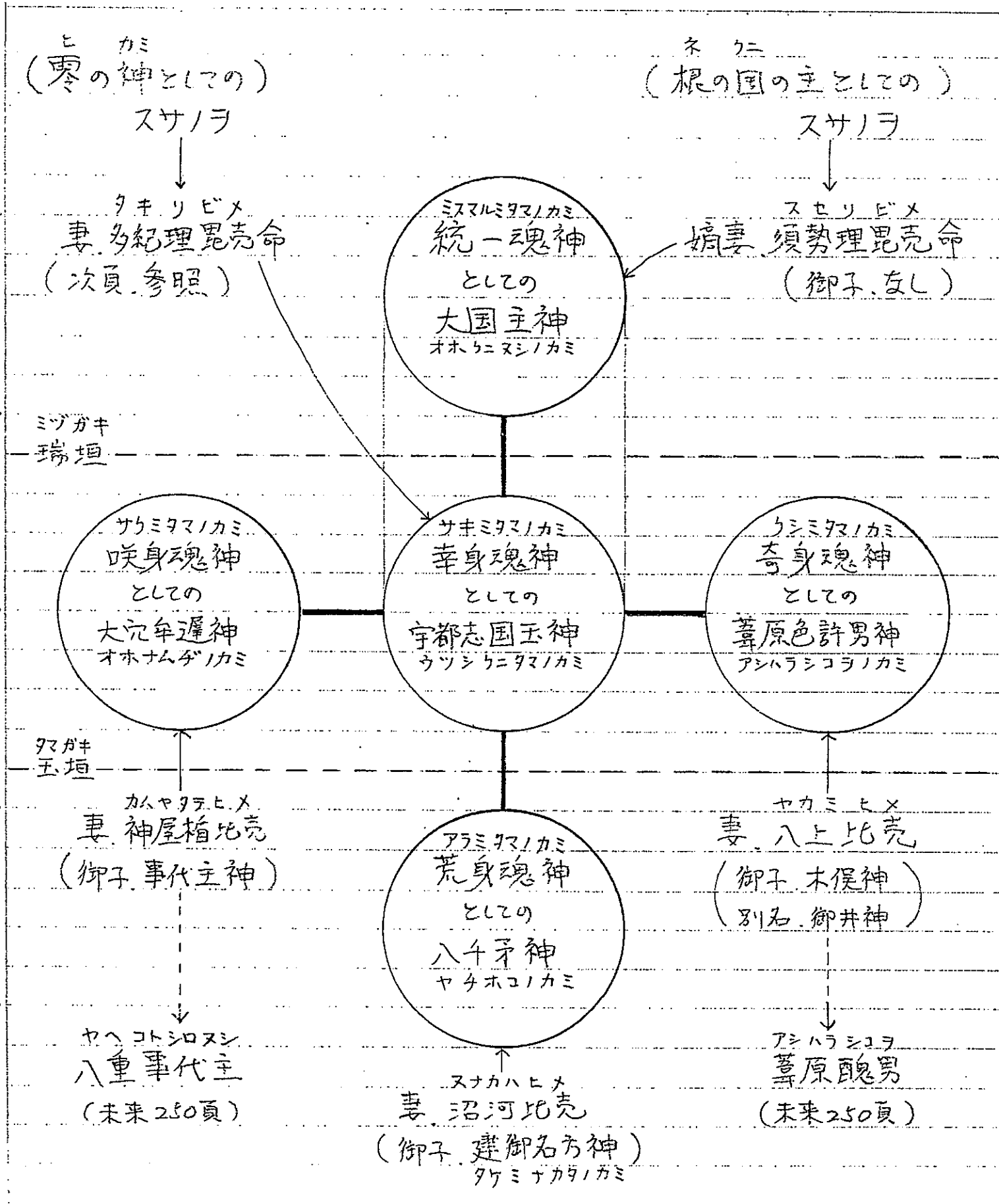
けれども、水無き沙漠の地では、止むを得ぬから、砂を用ゐる。其の様式を傳へたのが、

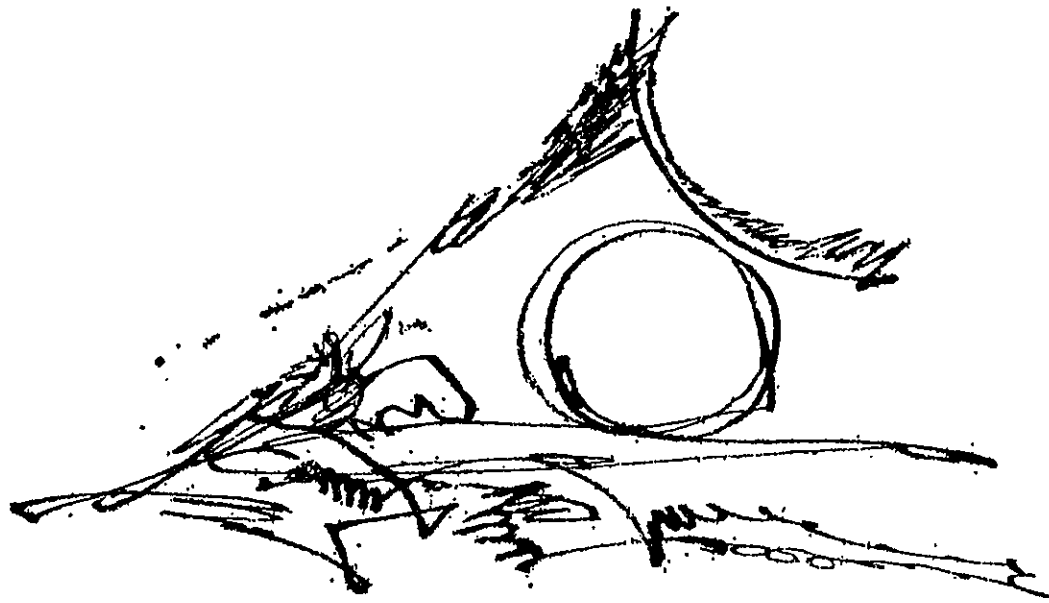
第十七、「八上比賣」の祓事である。

「ヤカミヒメ」とは、八神齋庭の祓言であると、先に述べましたが、古典は、物語體に記して、稻羽の八上比賣と稱する姫君としてある。

「大國主神の御兄弟は、非常に多かつた。けれども、みんな、國を守ることも、繼ぐことも出来なくて、大國

図表1：オホウニヌシの構造 その1.





悉達多太子の悟證は、虚空藏菩薩の妙智であると云ふから、一圓光明の○であつて、人間身としては、唯一絶對と感ずる極樂淨土である。日本神道は、傳へて之を、高天原と稱へまつるので、天照皇大御神の統治したまふところである。固より、二柱御祖神の言依ざし給ふところで、兼ねて、夜食國と、海原とを統治し給ふことは、

改めて説くまでもないのである。

その状態を假に圖示すれば如此である。

中心の圓相は、之和魂にして、天照皇大御神と稱へまつり、その下より升りて、時に、天照皇大御神をも凌ぎたまふは、荒身魂にして、建速須佐之男命と稱へまつり、下より下に一環連係するものは、月夜見・月弓・月讀命と稱へて、眞身魂・幸身魂・奇身魂の神にてましますと共に、時に術魂と成りて、風波擾亂の慘劇を演ず。

秋風の、早くも訪へば、禊せし、

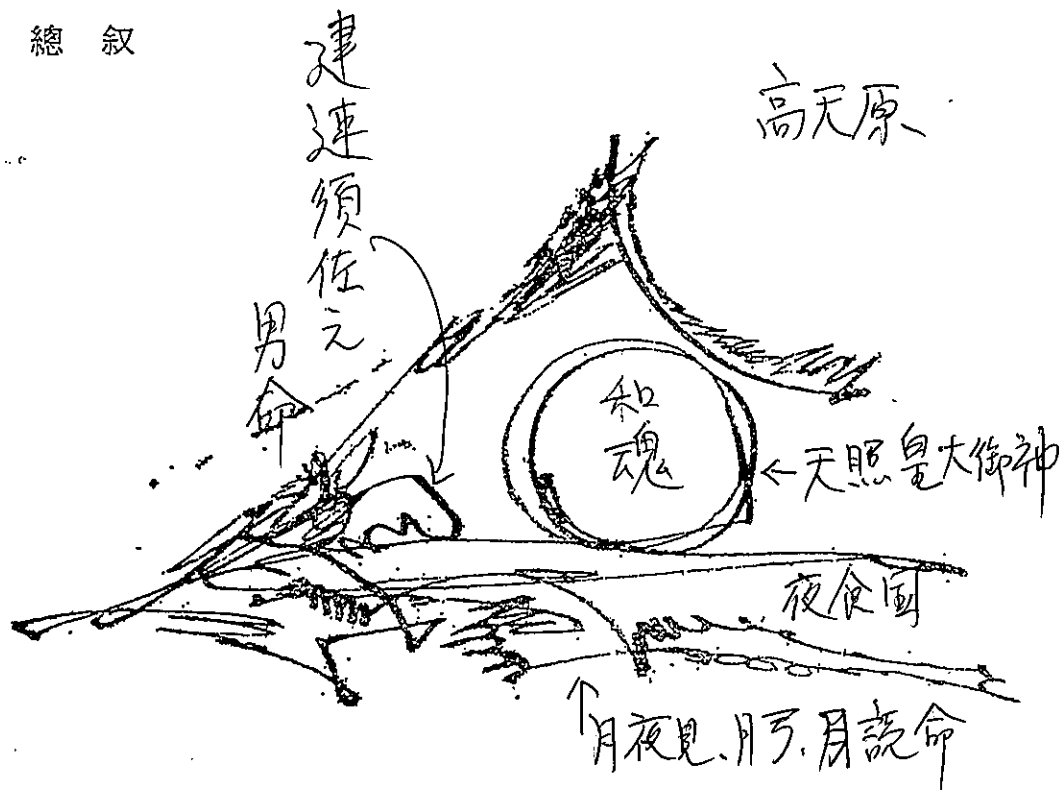
渾河のあたり、柳黄ばめり。

と、古老の嘆じたる、人間世界の實際である。

此のやうなわけで、

高天原たる極樂淨土は、一圓相で、神言靈であると共に、其の反對の面が存る。

否。



悉達多太子の悟證は、虚空藏菩薩の妙智であると云ふから、一圓光明の○であつて、人間身としては、唯一絶對と感ずる極樂淨土である。日本神道は、傳へて之を、高天原と稱へまつるので、天照皇大御神の統治したまふところである。固より、二柱御祖神の言依ざし給ふところで、兼ねて、夜食國と、海原とを統治し給ふことは、

改めて説くまでもないのである。

その状態を假に圖示すれば如此である。

中心の圓相は、之和魂にして、天照皇大御神と稱へまつり、その下より升りて、時に、天照皇大御神をも凌ぎたまふは、荒身魂にして、建速須佐之男命と稱へまつり、下より下に一環連係するものは、月夜見・月弓・月讀命と稱へて、眞身魂・幸身魂・奇身魂の神にたまはしますと共に、時に術魂と成りて、風波擾亂の慘劇を演ず。

秋風の、早くも訪へば、襖せし、

渾河のあたり、柳黄ばめり。

と、古老の嘆じたる、人間世界の實際である。

此のやうなわけで、

高天原たる極樂淨土は、一圓相で、神言靈であると共に、其の反對の面が存る。

否。

事實は、一切が高天原なのであるが、人間身は、此の中に在りながら、邪惡を認め、醜陋を感ずるが故に、娑婆だとか、六道だとか、魔界だ、苦境だと、別け隔てをして、自^{ミツカラ} 悩み、自^{ミツカラ} 苦しみつつ、出頭没頭、阿鼻叫喚の慘劇を演ずるのである。

無間地獄の叫喚を聞きて、之を憐み、之を悲しみ、大慈の眼を轉じ、救済の筏を造り、梵音普く、衆生を導き給ふは、觀音妙智の祕言靈で、過去七佛相傳の一音響である。

一圓一音昭昭琅琅

即時救出六道魔界

神魔剖割在於一几

之是日本天皇教矣

一言の、葛城主や。神守る、森の榊を。

我が君の、御佩にして。うなねつく、我がうじものよ。

しづはたの、ぬさのしづりよ。

みほぎする、今日のよき日よ。

ももことの、にはの小雀。

ちちことの、河邊の千鳥。

何すとか、立ちは騒げる。

今日の吉き日に。

2019.9.24

寺19頁より

1行目 人間身としては、唯一絶対と感ずる極楽浄土である。～

↓
5行目 その状態を仮に図示すれば如次の如くである。

極楽浄土、高天原（兼ねて夜食国と海原とを総括し給ふ。）

天照皇太御神	—	和魂	}	人間の構成の
月夜見月弓月読命	—	奇身魂		高天原における元型
建速須佐之男命	—	幸		
		真荒		

→ ここで言う荒身魂は、肉体身そのもののことではなく

肉体身の元型となっている霊的な要素のこと。

→ つまり、無宇宙（高天原）の側に存在して、かつ、

人間の肉体身と構成するための「背景原理」（元型）と

して機能しているのが、タマハヤスサカヲノミコトなのである。

（月夜見月弓月読命、も同様である。）

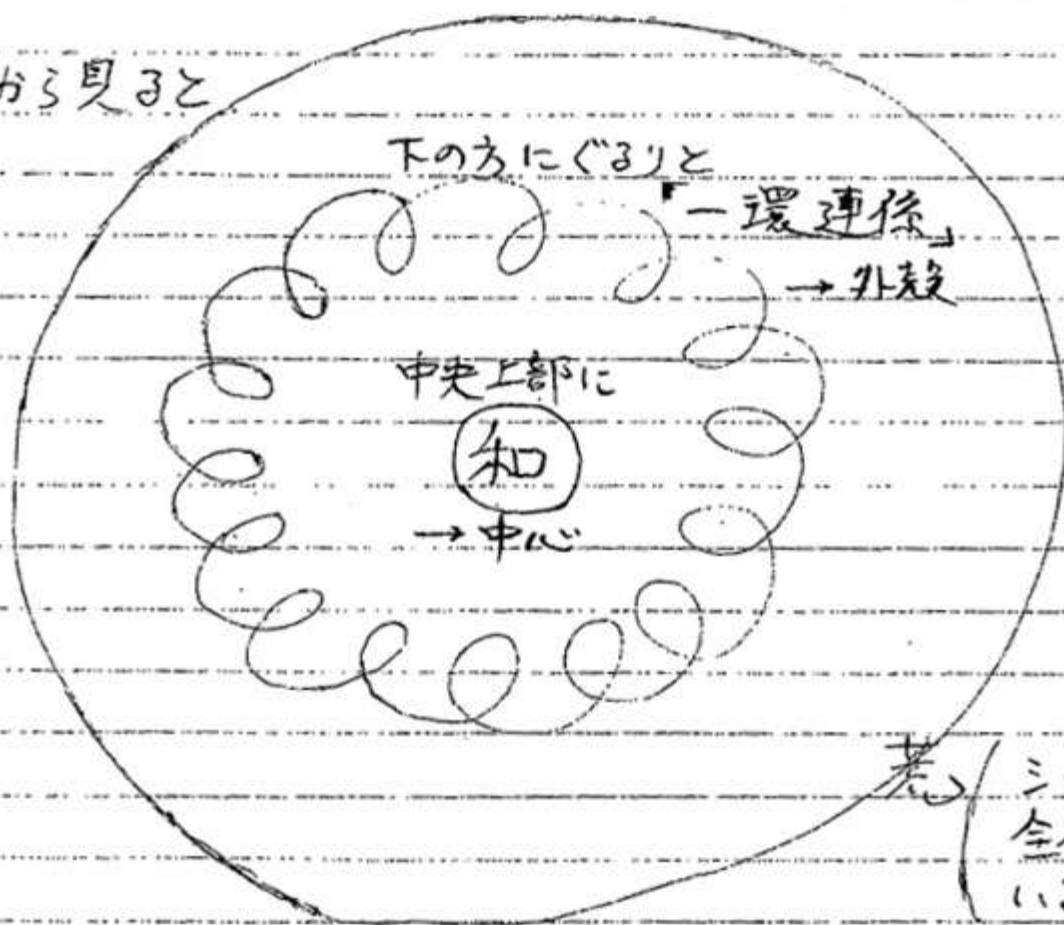
〇〇身魂の神	—	高天原の ^{ヒノカミ} 零の神 (無宇宙)	「元型」
人間の〇〇身魂	—	宇宙の側の実体	↓ 「その顕現」 あらわれ

幸19頁より 高天原のイメージ図

真横から見ると



真上から見ると



荒 / シート状に
全体にガバさ
いるイメージ
→ 最外殻

2017.8.22(火)

人間では

ニギハヤ

ニギ

一番上

(無宇宙の和魂)

直曰

アラ

一番下

魂の神をば奇身魂

身の神をば幸身魂

身魂の神をば真身魂

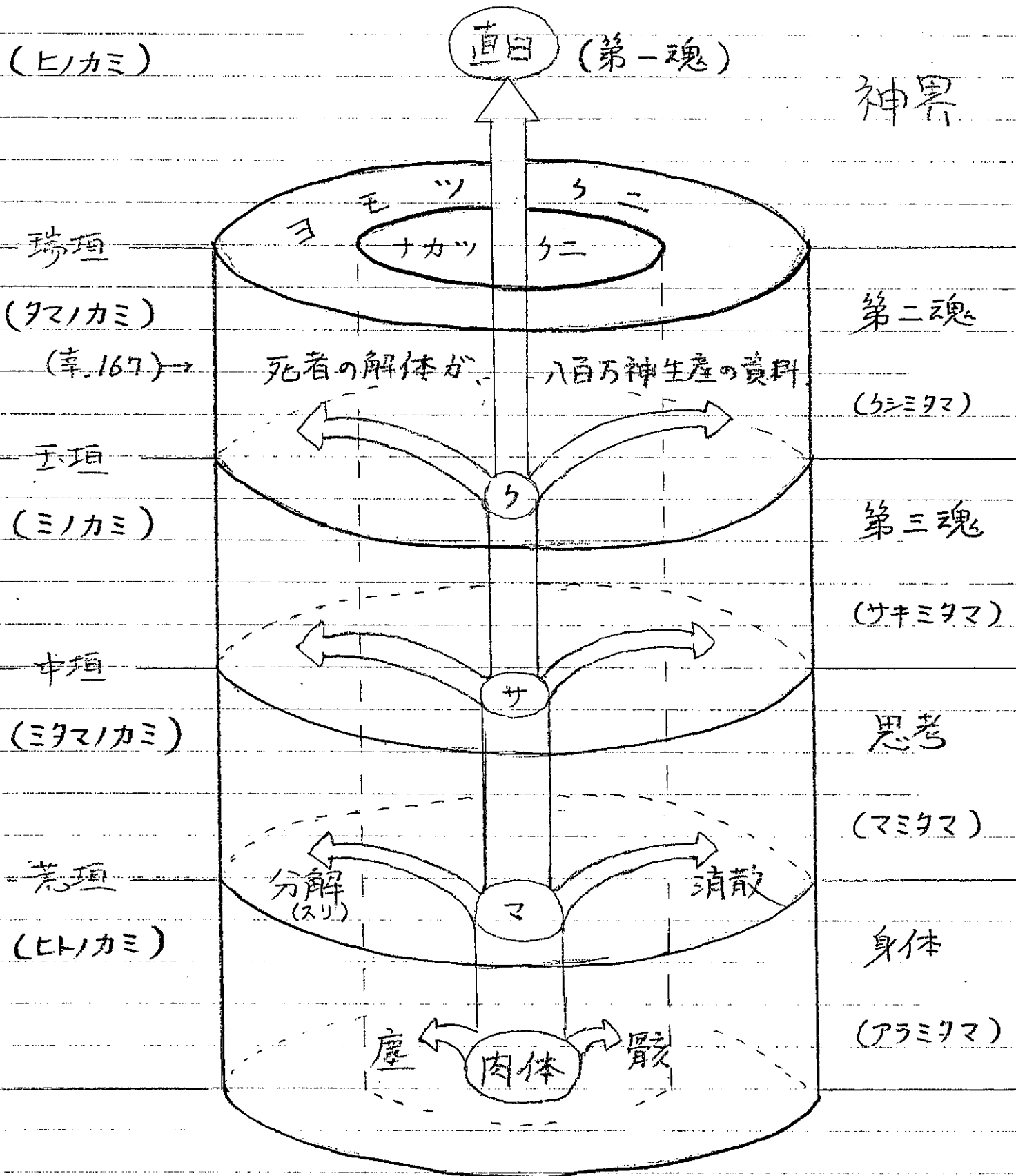
人間では
肉伴身

(荒魂 / 荒身魂)

「月神事」と 幸.19頁の用語

無宇宙	第一魂 (直目)	(教理では) 「五」④	ニギミタマ 和魂 ミタマ (御魂)	アラタスミコ 天照皇大神
ミツガキ 瑞垣				
宇宙の 第一階層	第二魂 (霊)	④~ ↑ 合わせて、	クシミタマ 奇身魂	↑ 合わせて、
タマガキ 玉垣				
宇宙の 第二階層	第三魂 (念)	「 霊念思考 」	サキミタマ 幸身魂	ツキヤミ 月夜見
ナカガキ 中垣				ツクユミ 月ヨミ
宇宙の 第三階層	思考	↓	マミタマ 真身魂 (川面用語では) 「まがみたま」	ヨミノミコト 読命
アラガキ 荒垣				
宇宙の 第四階層	身体 (肉体身)		アラミタマ 荒身魂	タケハヤスサヲノミコト 建速須佐之男命

死者のミタマと月読命の作用



人間身においては、

直日 (本来の神)

サキタマ-タシタマ (神に帰順した子マカツビ) → マカツビ

マカツビ②

アラタマ-マタマ (まだ充分には神に帰順
してないマカツビ) マカツビ①

れ、更に、神産巢日神の御子少名毘古那神と二柱相並びて、此の國を作り堅めさせられたのである。それは、とりもなほさず、神産巢日御祖命としての産土神たる神徳を具足し給はんが爲に、二柱の神が一柱としての兄弟エトと成られたのである。

それにつけて、重要なことを古典は傳へてある。「大國主神が、吾獨して何如でか能く此の國を作られようか、孰れの神と與どもに爲たならばよからうかと、御心配なされた時に、海を光テラし寄つて來られた神の白されますには、何もそのやうに憂ふるには及ばぬ。唯、みづからの身魂をみづから治むるならば、必國は成るものである。が、若然うでなければ、決して出来るものではない。その治め方は、倭の青垣東の山の上に伊都伎祭イツキマツるのである」と。

ひむがしの、あをかきやまの、やまのうへの、あが幸魂サキミタマ・奇魂クシミタマ。幸きく眞幸きく、常世にもがも。

そのやうにして、大國主神は、國を作り治められたのである。それを、天照大御神には、豐葦原の千秋長五百秋の水穗國は、吾が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の知らすべき國であると仰せられた。けれども、天忍穗耳命は、天浮橋にたたして、その國は、擾々ユルユル、始末がつかぬと思召されて、お還りになられた。

曩に、「日神の仰せらるゝには、吾弟の上り來ますは、必我が國を奪はんとしてであらう。」と、古典の記したことを擧げて置きましたが、此の仰せは、實にも畏き極みで、後代、大國主神に到つて實証されたのである。須佐之男命が宇宙分割の野望は、恐多きことではあるが、天照大御神の御仰せの如くであつたことが、此ここに明に

り、神言を誦し、神樂を奏し、神身を築き成して、神光を發揮したので、之は、天宇受賣の禊と稱へまつるべく、高天原と葦原中國との開闢を教へられたのである。

天地開闢而。神聖生其中焉。日毎日毎、日の大御神生れますと。

鄙の髻髪^{ウナギ}が、歌をかしかも。萬代に、我は變らじ。我が友の、

世世の玉の緒、結び結べば。

結び置きし、門の若柳、繁り合ひ、枝分かずこそ、色増さりけれ。

神代紀としての古典は、禊の行事を待つて、初めて釋くことが出来る。古典の上に、日の神御生誕の記載が、幾回となく繰り返されてあることもまた、禊の教へを待たねば分らぬであらう。

第十三、「櫛名田比賣」

「速須佐之男命は、神夜良比夜良波衣^{カムヤラヒヤラハエ}て、出雲國の肥の河上の鳥髪と云ふ地^{トコロ}に降られた」とある「夜良比」は、「遣らひ」「却らひ」等と當ててあるやうに、すっかりと全部を棄てるので、「瀬織津比咩神・速開都比咩神・氣吹戸主神・速佐須良比咩神。持ち佐須良比失ふ」もので、完全に祓得た暁である。

之を、別の方面から云へば、汚れた着物の洗濯が出来上つたのであり、塵塚の塵芥が焼き盡されたのであつて、「遣る罪は在らじ」と、根の國底の國にて失ひ果てたのである。尙、言ひ換へると、地獄の釜の底を打ち摧いた暁である。

すると、其處には、肥川^{ヒノカワ}が流れ、日神^{ヒノカミ}の伊呂勢^{イロセ}の命としての本來の面目に立ち歸つた建速須佐之男命の立たせ給ふのである。その「素戔鳴尊立ちどころに、奇稻田姫に化りて、湯津爪櫛^{ツク}を爲りて、「髻^{ミミソラ}に挿し給ふ」とある

日本紀の本文の如く、高天原に祓却らへ給へる御身は、肥川に禊し、鎮魂し給ひて、「足名椎・手名椎・櫛名田比賣・八俣遠呂智・都牟刈之太刀・八嶋士奴美神」を吹き成し給ふもので、建速須佐之男命の幸魂奇魂の神をば、「クシイナダヒメ」と稱へまつることが、祓禊の神儀を仰ぎまつりて、初めて知らるるのである。

天離る鄙にはあれど、三重の子が着る衣手の、五色のその中にして、

碧濃き大綿津見の、根の國の底ひ潛りて、

紫の大山祇の、足曳の山の尾分けて、

涯も無く限りも知らに、人の子の伊往き來にけれ。

並び立つ神の鳥居か、二柱御祖の神の、天なるや天浮橋。

久方の天沼矛を、

久士布留の天逆矛、

さかしまに手挿み立てる、

眞具に執りてぞ立てる。

その神のあやしきすがた、

その人のくすしき光、

白妙の衣の袖を、

八重たたむ裳裾の褶を、

から幾の綾もや有ると、